

第17回模擬国連会議関西大会 大会報告書



目次

I.はじめに

- ・日本模擬国連代表挨拶 3
- ・事務総長挨拶 4

II.模擬国連紹介

- ・模擬国連概要 5
- ・模擬国連の歴史 5

III.本大会事業について

- ・当事業の概要 7
- ・事業背景・目的 7
- ・大会スケジュール 8

IV.各会議報告

- ・東南アジア情勢 国際の平和と安全に対する影響 10
- ・「国際機構に関する連合国会議(サンフランシスコ会議)
United Nations Conference on International Organization」 12
- ・第二次国連海洋法会議 15
- ・新生、あるいは復興民主主義体制を促進、強化・定着させる
ガバナンスの取り組みへの国連システムによる支援 16
- ・キューバ危機 18
- ・World Conference on Human Rights
—Vienna Declaration and Programme of Action—
世界人権会議 —ウィーン宣言及び行動計画— 22
- ・Developments in the Field of Information and Telecommunications in
the Context of International Security 26
- ・万人のための持続可能なエネルギー
～持続可能な開発目標(SDGs)Goal 7 実現へ～
Sustainable Energy for All
～How to achieve Goal 7 of the Sustainable Development Goals～ 30

・会議総括	34
V.企画・活動報告	36
・基調講演	37
・当日企画	38
・レセプション	39
・大会見学ツアー	40
・神戸名所観光企画	41
VI.運営報告	
・参加者データ	41
・大会アンケート結果	43
・参加者向け広報活動	46
・取材広報活動	47
・会計報告	48
・支援団体一覧	49
・運営者一覧	50

I はじめに

■日本模擬国連代表挨拶

私たち日本模擬国連は、国際問題を扱う大学生によるサークル活動に取り組んでおります。国際問題を扱うと申しまして、ディベートサークルや政策立案サークルとは大きく異なる点がございます。

模擬国連ではその名の通り、国連外交を模擬させていただいております。国連外交における意思決定のプロセス、とどのつまりは、多国間での議論交渉、そしてただ一つの成果を目指し合意形成を試みるといった流れになります。ただし、ここにおいて求められるのは論破ではなく、はたまた政策を立案して発表するだけでも足りません。各人が各国の立場に立って一つの問題に向き合い交渉を行うことで、国際社会にとって、人間社会にとって何が必要であるのかを考え、気づかされてゆく活動なのです。

日本模擬国連代表部は、自らの活動とそれのもたらす効果を誇り、日本全国の高校生大学生に広くその機会をご提供させていただいております。毎年世界大会への参加者派遣も行い、その選抜メンバーは度々賞を戴いて参りました。国内でも全国規模の大会を主催しており、そのうちの一つがこちらの関西大会になります。

関西大会は近年その開催規模を拡大しており、海外参加者も迎える英語会議はもちろんのこと、今年度からは「大学生による高校生のための高校生会議」を開催が決定しました。通常、高校生会議は高校生間で行われることが多いのですが、私たちはあえて年代の枠を超え、高校生よりも精度の高いコミットが可能な大学生であるからこそ生産できる知的財産やノウハウを、ぜひ意欲ある高校生に直接提供したい、その思いでこの度高校生企画を立ち上げました。

日本模擬国連は今後もさらなる発展と充実を目指し、学生がいつの日か社会の立派な一員となるときのために、模擬会議とこのような運営経験をもって、能力、人間力双方をバランス良く身につけたグローバルリーダーを育成します。そして、この関西大会をはじめとする各事業は、そのような人材をつなぐプラットフォームとして非常に有用な営みです。志を同じくし、将来活躍することが求められる大学生の全国に広がる人脈は、社会にとっても個人にとっても貴重な躍動の源となるでしょう。

第17回模擬国連会議関西大会はこれにて幕を閉じ、第18回に向けてまた、新しい道を歩みだします。模擬国連という活動を関西の地から普及し、促進していこうとするこの事業は私たち日本模擬国連の使命にかけて、決して絶やすことのできない事業です。今後とも皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

■事務総長挨拶

ご挨拶

模擬国連とはその名の通り国連を模擬する活動です。多様な国家が主体となって様々な国際問題に取り組む場である国連、その国連での意思決定を題材に、参加者は各国様々な視点から国際問題に向き合います。

他方で、国連が取り組む諸問題に絶対的orrect解が存在しないのも事実であり、それゆえ私たちが模擬する会議においても帰結すべき結論はありません。私たちが模擬するもの、それは答えのない問いへ解を導き出すプロセスそのものであるともいえます。

本活動は、国際の政治や問題への理解を深めるとともに、答えのない問に向かって自ら課題を設定し解決を図る能力を体験的に育む機会であり、これからの国際社会で活躍する人材の育成に大きく貢献するものです。

私たち関西大会運営事務局は、これまで多くのご支援に支えられながら、これら模擬国連活動の機会を17年間にわたって提供してまいりました。本年は従来の大学生向け会議に、新たに開催する高校生向け会議を加えた8つの会議を開催し、全国各地250名以上の高校生・大学生に模擬国連活動の機会を広く提供いたします。

これからも関西大会は、多くの学生に模擬国連活動の機会を提供し、活動の普及促進と人材の育成に寄与してまいります。

今後とも本活動ならびに本大会へのご理解とご支援を賜りますようお願いを申し上げます。

第17回模擬国連会議関西大会運営事務局 事務総長

奥山 智司

Ⅱ 模擬国連紹介

■ 模擬国連概要

グローバル化の中で生きる私たちにとって、他国のことを知り、複雑な国際政治の仕組みを理解するということは、必要不可欠です。しかし、自国以外の国に深く触れる機会があまりないというのが現状です。

模擬国連では、参加者一人ひとりが一国の『大使』になりきり、実際に国際連合をはじめとする国際会議の場でなされる様々な国際問題についての会議を模擬することにより、国際問題への理解・関心を深めると同時に、将来的に国際社会で活躍するのにふさわしい多角的視野・技術・能力を身につけた人材の育成に寄与しています。

■ 模擬国連の歴史

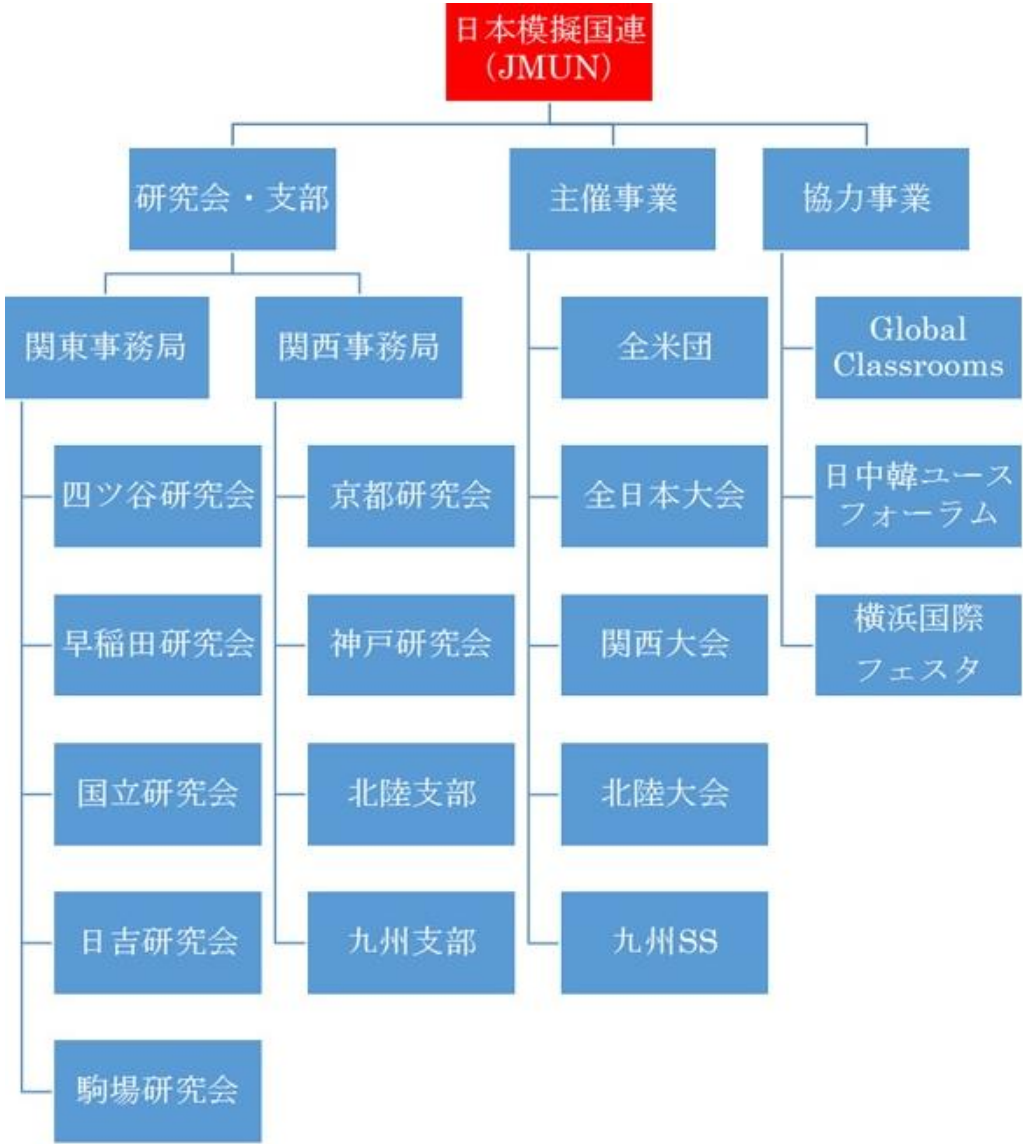
模擬国連(Model United Nation、通称 MUN)は、1923 年にハーバード大学において始まった「模擬国際連盟」がその起源となっており、現代では欧米からアジア、アフリカまで、世界中の高校・大学で活動が行われております。日本では、1983 年、当時上智大学の教授であり、後に国連難民高等弁務官を務めることとなる緒方貞子顧問の下発足しました。当初は毎年ニューヨークにて開催されている「模擬国連会議全米大会」への代表派遣が主な活動でしたが、現在では日本中に模擬国連団体が存在し日々活動を行っています。また、それらを統括する組織として「日本模擬国連」という組織が存在し、年 4 回開催される模擬国連の全国大会(模擬国連関西大会、九州サマースェッション、北陸大会、全日本大会)を主催します。また、各地の大学や高校の授業でも、国際社会理解の一環として取り上げられています。現在会員数は 700 人を超え、東京大学、京都大学、早稲田大学、慶應義塾大学をはじめとする有名大学の学生が多数在籍しています。なお、今年夏には神戸で National Model United Nations(通称 NMUN)という模擬国連の世界大会が開催され、世界中の学生が神戸に集まる予定となっております。

■ 団体紹介(日本模擬国連について)

本大会の主催団体である日本模擬国連(Japan Model United Nations: J MUN)は、1983 年、当時上智大学の教授であった緒方貞子女氏(元独立行政法人国際協力機構(JICA)理事長元国連難民高等弁務官)の顧問の下、発足した「模擬国連実行委員会」を起源としています。現在、日本

模擬国連の下には関東事務局・関西事務局の 2 つの事務局が存在し、それぞれに活動母体としての研究会・支部が付属しています。現在では、全国で約 700 名程度の学生が活動をしています。各研究会・支部レベルで活動を行うほか、JMUN としても、全日本大会や関西大会、毎年ニューヨークで開催される大会に日本代表団を派遣する事業、あるいは一般の団体に対する講師派遣、新団体の設立補助などを行っています。

組織図は以下のとおりです。



Ⅲ 本大会事業について

■ 当事業の概要

第 17 回模擬国連会議関西大会

The 17th Kansai Model United Nations Conferences (KMUNC17)

期間:平成 29 年 8 月 28 日(月)～8 月 30 日(水)

会場:神戸国際会議場及び神戸ポートピアホテル

対象:大学生を中心とし、大学院生や高校生なども含む

定員:270 名(運営事務局員などのスタッフを含む)

参加費:27,000 円

主催団体:日本模擬国連

運営組織:第 17 回模擬国連会議関西大会運営事務局

■ 事業背景・目的

近年のグローバル化の進展により、国際感覚を持つ優れた人材が社会から求められるようになりました。それに伴い日本だけでなく世界を見据えた多角的な視野を持ち、社会に貢献できる人材の育成に有益な模擬国連活動の価値が向上したことが、当事業開催の背景にあります。

そして当事業のもっとも重要な目的は、模擬会議を通じ、参加者の能力や知的好奇心の向上を基礎に置いた人材育成です。現在、日本の多くの学生が各模擬国連団体や高校・大学の授業で模擬国連会議を行っています。今後も模擬国連を経験するたくさんの学生が難解な国際問題の解決のために思考をめぐらすことで、様々な能力を向上させ、物事を多角的な視点で考えるすべを身に付け、国際社会で活躍できる人材へと成長することが期待されます。当事業は、そのような人材育成・自己の能力向上を提供する場の一つとして開催されています。

また、関西に 250 人を超える学生が切磋琢磨する場を設けることで、学生間の交流を促進しお互いに刺激を与え合う環境を作ることも当事業の目的です。

昨年 11 月には National Model United Nations という模擬国連会議の世界大会が神戸で開催され、世界中の学生が集まりました。そうした世界的な会議で日本人が活躍するためには多くの会議を経験し、議論することで成長していくことが重要になります。

そこで、当事業は、日本語だけでなく英語での会議を実施し、日本人だけでなく、様々な文化を持つ参加者を募る予定です。国際問題を解決したいという強い思いを持った様々な国の参加者とコミュニケーションを取ることで、普段日本には味わえない刺激を受け、グローバル化の

中で生きる私たちにとって必要な語学力の向上にもつながります。

当事業は、西日本随一の規模を誇る模擬国連大会として、日本人の学生が世界で活躍できる人材へと成長するための場を提供しております。

■大会スケジュール

【準備日程】

5/25	第 1 次募集開始
6/13	第 1 次募集締切
6/25	第 2 次募集開始
7/4	第 2 次募集締切
7/9	会議勉強会① 関東にて
7/10	会議勉強会① 関西にて
7/16	会議勉強会② 関東にて
7/17	会議勉強会② 関西にて
8/22	プロシージャ講習会、大会前泊
8/23	大会 1 日目
8/24	大会 2 日目
8/25	大会 3 日目・大会後泊
8/26	観光名所紹介企画

【当日日程】

	当日スケジュール
1 日目	【開会式】
	11:30 開会 研究統括挨拶 会議紹介 基調講演 協賛/後援/助成団体紹介 事務総長挨拶
	13:00 昼食休憩・移動
	14:00 模擬会議 1st meeting
	18:00 夕食休憩

	19:00 模擬会議 2nd meeting
	20:30 1 日目模擬会議終了
	09:30 模擬会議 3rd meeting
	12:00 昼食休憩
	13:00 模擬会議 4th meeting
	18:00 夕食休憩
	19:00 模擬会議 5th meeting
	20:30 2 日目模擬会議終了
	09:30 模擬会議 6th meeting
	12:00 3 日目模擬会議終了・昼食休憩
	12:00 レビュー/7th meeting
	【閉会式】
	15:00 各会議講評
	研究統括挨拶
	日本模擬国連 他大会及び事業紹介
	事務総長挨拶
	閉会
	ホテル移動・着替え・休憩
	【レセプション】
	18:00 レセプション開始
	21:00 レセプション終了

IV各会議報告

■東南アジア情勢 国際の平和と安全に対する影響

会議監督:高木凌佑

【会議概要・目的】

運営側の能力の許す限りで、国連のプロシージャ、クライシスの導入をすすめ、圧倒的リアル志向である実際に国連で行われる紛争系会議を実現しました。目的は二点ありました。一点目は、参加者に対して通常の模擬国連の会議が、いかに会議監督の横暴によりプロシージャ、マンデート的に歪んでいるのかということを認識させることです。二点目は、実際の国連プロシージャ、クライシスを用いることで、実際の国連大使と同等またはそれ以上の負荷を負わせることにより破壊的な成長をさせることでした。

【会議経過・成果】

陣営の優劣勢や議場の雰囲気が一転三転する、実際の国連に近い会議になりました。基本的に時系列に沿って会議の出来事を記述していきます。

始めの段階においては議場が二つに分かれて議論がされました。一方では安全保障理事会の議題に関する議論が安全保障理事会でおこなわれ、もう一方では各国の意見交換が多国籍フォーラムで行われました。双方ともに活発な議論が行われました。それだけではなく、戦略的にこの「議題を議論する」段階を利用し、自陣営に有利な流れを形成し、成功する大使もありました。最終的には、安全保障理事会の議題が安瀨保障理事会の過半数により採択され、安全保障理事会での議論が始まりました。30分ほどの間、非理事国は安全保障理事会に参加することをためらっていたが、結局全非理事国が安全保障理事会に参加し、安全保障理事会がいかに対応をとるのかということを議論していました。この非理事国参加によるアクター数増加により、決議案を作成することが難しくなり、非同盟諸国や中国は苦戦を余儀なくされました。

非理事国参加以前においては、「the situation in Kampuchea based on telegram dated 3 January 1979 from the deputy prime minister in charge of foreign affairs of Democratic Kampuchea to the president of the security council」という比較的中国優位な議題が採択されたこともあり中国が優勢でありました。しかし、先にも述べた決議案作成難航により、安全保障理事会が中国優位な議題においては何ら意思決定をしない、つまり議題に問題があるとの意思表示を暗にしたことになりました。これにより、形勢はイーブンへと変貌しました。

安全保障理事会で何も決議が出ない中、ついに中国がベトナムに対して侵攻を行いました。この侵攻に対応するために、安全保障理事会は一度閉会され、また一から議題を決める議論を開

始しました。この議題を決める議論は比較的円滑に進み、2時間も経たずに議題は採択されました。一度目と異なり、非理事国も採択後すぐさま安全保障理事会に参加し、中国の侵攻への対応が審議されました。審議の結果、中国非難決議、ベトナム非難決議、第三諸国決議が提出され、中国非難決議は中国の拒否権で落ちベトナム非難決議が反対多数で落ちました。史実では、中国が拒否権を使わされることやもっとも中国非難決議すら出ていなかったことや、また史実ではソ連が拒否権を使わされていたことを考えるとこの段階では、東側が圧倒的に優位な状態であったといえたでしょう。しかし、中国がベトナムから撤退し、議題が「the situation in Southeast Asia」にかわると、またもや状況は変貌していきました。まず、中国が地道に続けてきた第三諸国への印象操作が花を開き、第三諸国の中で中国が擁護されるような風潮が生じていきました。そして、先述した民主カンプチアやシンガポールが地道に行い続けた ESS 開催交渉により、西側に ESS 開催を受容するような風潮が生まれていったのです。東側も決死の ESS 開催阻止を目的として交渉を行ったが、最後に緊急特別総会を開催する決議が採択され、「the situation in Kampuchea」に関して緊急特別総会を開催するという意思表示を行い、会議は終わったのです。

【会議総括・課題】

会議全般としてはうまくいったと思っています。しかしながら、二点の大きな課題があったと考えられます。一点目は、参加者のキャンセルが相次いだこと。特にキャンセルした国のなかに、ベトナムやマレーシアなどの重要国が含まれていたことは、会議実施の危機を誘発するものでありました。実際には、フロントをベトナム大使として対処した。当面の危機は脱したが、結局当日フロントとして行動できる人員を減らす形となってしまったため、予断を許さない状況が続き、参加者に対して配慮あふれる対応ができていなかったと考えられます。参加者のキャンセルが相次いだ原因としては、関西大会の構造的問題もあげられます。しかし、参加者への呼びかけが十分にできていなかったことが第一の原因であると考えられます。ただ、成長をさせるというある種の自立を促進させる会議において、呼びかけをもっと行うということは会議の目的と反するものでもあり今回の最善策だと断言することもできません。ただ一つ確実に言えることとして、今後参加者の成長を目的とする会議においては、キャンセルをいかに防ぐかということも考慮する必要があることがわかりました。

二点目は、参加者が英語 DR の作成に手間取っていたこと。これには、DR 作成になれていなかったことと参加者の英語能力が欠如していたことが原因として考えられます。しかし、体裁面というよりもむしろ英語文法で悩んでいたという事実を考慮すると、英語能力の欠如というものが一番の原因であったといえるでしょう。国際社会において、また国際法においては、英語が使えなければ意味がないです。英語による表現でなければ、細かいマンドートに関する交渉や国際法に関する交渉が全くできないのです。模擬国連における議論が深みを維持するためにも、参加者の英語能

力を向上させる必要があると感じました。

以上二点が、今会議の課題であり模擬国連における育成会議全般における課題でもあると思います。

■「国際機構に関する連合国会議(サンフランシスコ会議) United Nations Conference on International Organization」

会議監督: 出口 ちひろ

【会議概要・目的】

1945年4月、世界中を惨禍に陥れた第二次世界大戦終結間際、連合国側だけが集められ新しい世界秩序の構築に向けて議論が交わされました。それが今回模擬したサンフランシスコ会議です。新しい国際秩序の根幹をなす国際連合の憲章を作るこの会議において各国が目指す平和な世界とはいったい何であったのかを深く突き詰め、未来から過去を見つめる会議となればと思います。拒否権は果たして必要なのか、総会と安保理はどう違うのか、地域的取極と安保理はどのように関わらせるべきか…。国連憲章が定める「集団安全保障体制」を正確に理解し、そこから見えてくる現在の国際社会における安全保障の在り方と向き合って頂きたい。会議設計はもちろん、BGや勉強会等全てを構成しました。

現在の国連と向き合い、当時の各国が何を考えていたのかに思いを巡らせ、歴史を、未来を再編成してもらい、国際連合憲章が採択される過程を模擬することにより、国連の設立の背景はもちろんのこと国連が現在抱える問題とも向き合ってもらいたく会議を作成しました。

今会議のコンセプトは「価値観の相対化」と「国益の先を見据える」です。

一つ目のコンセプトである「価値観の相対化」というのは、自分の担当国と他の人の担当国の考え方の違いや、ペアで議論するときに自分とペアの間にある価値観の違い、そして国内における政策立案者の価値観の違いを意識してほしいという想いから設定しました。この「価値観の相対化」というコンセプトは、特に事前準備書類であるタスクと呼ばれるものに反映させ、参加者が自己の価値観に捉われすぎず、多角的視点を持って議論に移行できるよう工夫しました。

二つ目のコンセプトである「国益の先を見据える」に関しては、今会議がいかに歴史のターニングポイントであったかを意識してほしいと設定しました。普段の会議はその会議でどのような行動をするべきか、どのように国益を反映するべきかだけ考えることが多いですが、今回の会議は自分の会議行動や主張がその後の世界の在り方を大きく変えることになるという事を意識し、今会議内における勝利だけでなく、長期的視点に立った歴史的勝利を模索してほしいと考えました。参加者に会議監督の思いが少しでも伝わっていれば幸いです。

【会議経過・成果】

結論から申しあげると、史実とほとんど変わらない形での国連憲章が採択されました。今会議は「拒否権」についてのみ議論する分科会と、「総会と安保理の関係性」及び「地域的取極」についてのみ議論する分科会に分け、その二つの議場を分割して交流を断ち、一定の時間を設けてペアとだけ会議の進捗を報告しあうことができるような設計にしました。

拒否権の分科会においては、常任理事国のみに拒否権が認められ、国連憲章の 27 条の原型のようなものが採択されました。これは私の想定通りでありました。というのも、現在 2017 年に生きる私たちにとっては、その後の国際社会において冷戦が起こり、拒否権の不必要な乱発が起こる事実や、それによって安全保障の根幹を成す安全保障理事会が機能不全に陥る事実を知っているからこそ、拒否権の抱える危険性を考えることができます。しかし、1945 年における当時の各国代表は、拒否権が乱発されるという可能性は示唆しつつも、その可能性が非常に低いものであるという事を前提としていました。ゆえに常任理事国となる 5 カ国がいかに中小国によって拒否権の制約事由や運用方法について議論させられ、検討し、内容を詰めてくかというところが勝負だと考えていました。

実際に今会議での議論の内容は非常に興味深く、安保理の投票における「棄権」の扱い方や、紛争当事国の拒否権の扱い方など、私が想定している以上の話が議論され、内容は非常に濃いものとなったと思っています。また、会議において常任理事国や非常任理事国の数の議論を排除したことで純粋に拒否権の存在意義について議論してもらえ、嬉しく思っています。会議監督としては非常に満足がいく結果が出たと考えています。

一方、「総会と安保理の関係性」や「地域的取極」の分科会においては、初めの段階で議論の方法を議論する時間を長く取りすぎたにもかかわらず、その後ロードマップが決まらず、実質的議論の時間が大幅に削られるという非常に悲劇的事態が起こってしまいました。そして、その実質的な議論がなされない状態であったにも関わらず、何かしらの結論を出さなければという焦りが各参加者を良くも悪くも突き動かし、結果として史実に近い形での草案が突然登場し、それがコンセンサスで採択されるということになりました。正直なことを申し上げると、会議監督としては残念な気持ちを抑えません。この分科会での一番の山場は、集団的自衛権の議論のはずでした。史実では 51 条という形で存在しているこの概念が初めて公に議論されたのがこの会議だったからです。集団的自衛権をどう捉えるかという議論の中で、ソ連が主張する「敵国条項」の議論が沸き起こり……。と言うのが私の想定であり、その議論を見ることを楽しみにしていました。ですが実際には集団的自衛権の条項が突如として草案に組み込まれ、議論がないままに敵国条項も草案に入ってしまった。その状態を見た時は正直本気で悲しくなりました。その草案がさらにコンセンサスで通った時にも会議監督としては怒りを覚えました。

しかしながら時間的制約と、私が参加者へこの議論についてそこまで誘導をしていなかったということがこの状態を作ってしまったということは分かっていたので、個人的に参加者にレビュ

一で私の真意を伝えることで納得してもらい、今後このようなことがないようにと述べるに留めました。参加者の皆様も理解してくださり、今後に生かしたいと伝えに来てくれ、この会議を作った甲斐がここでもあったのではないかと嬉しく思いました。

議論については紆余曲折ありましたが、無事に国連憲章を採択することができたことは嬉しく思っています。

【会議総括・課題】

【サンフランシスコ会議参加者に提供できたこと】

サンフランシスコ会議を作ろうと思った原点はもちろんコンセプトの合致というものもありましたが、模擬国連をしている以上国連憲章に立ち返る機会が必要だと感じたからでした。この会議が最終的に成功するか否かに関わらず、国連憲章と向き合う時間を参加者に提供できるということは、この会議に参加してくださる参加者に一定レベルの参加する価値を提供することができる考えたからです。会議が終了した後、多くの方に今会議の参加者はみな国連憲章を深く理解しているため、今後の会議における議論の前提として国連憲章をきちんと把握し議論をすることができると言っていました。この言葉は私が今会議を作った原点を参加者がきちんと理解してくれたことを意味していると考えます。

また、最終的に議論が尽くされきらなかったところはあるつつも、国連憲章を採択できたため、この会議は成功したと思っています。同期以上のかなり会議ができる参加者がいてくれたおかげでもあります。高度な議論が見れたことは、模擬国連を始めて1年目や2年目の参加者にとって得るものがあつたのではないかと考えています。

全国大会において1年目の人にとっては自分が何をできるか考え、壁にぶつかる場だと考えています。一方2年目の人にとっては自分の実力を試し活躍して自信を付ける場だと考えています。3年以上の人にとっては模擬国連の型を破り、今までは見えなかった世界を見、そして後輩に背中を見せる場だと考えます。今回の会議はおそらく1~3年目以上の人全員が何かしらの形でこの会議を通して得るものがあつたのではないかと私自身感じているとともに、私自身がこの会議を作成することで大きく成長できたと感じている所存です。

【会議運営について】

会議内容とは異なりますが、今回サンフランシスコ会議は会議運営にも非常に成功したと思っています。参加してくださった方全員が全力で会議をやりきる環境を作ることができたからです。その手段としては、全ての国をペアデリゲイツ制にすることで、自分の事前準備の甘さが、ペアを組んでいる相手にも影響してしまうという連帯責任のような感情を起こさせることで、準備を怠る人が出てくるのを防ごうとしました。また、分科会ごとに分けて一人一つの分科会を担うことで、自分の

行動をペアの相手に任せっきりにすることなく、責任をもって会議を頑張ることができるようにと考えました。これらが幸いにもうまく機能し、全国大会としては珍しくタスクの提出状況が非常によく、会議監督としては嬉しく思っていました。

事前会合というものも設け、会議に至るまでの 1 週間を事前の交渉に充ててもらいました。これもきちんと準備をして会議に臨まなければ会議当日についていけないという意識を参加者に持ってもらうきっかけとなったと参加者に後から伝えられ、設けてよかったと感じました。

【課題】

議題の内容が難しすぎたことや、タスクの内容が重たくなりすぎたことで、参加者に準備段階から負荷をかけ過ぎたという点は反省しています。また、議論の内容が想定を外れてしまったのは会議監督の参加者とのコミュニケーションの取り方の不足だったのかもしれないと反省しています。しかし、それを鑑みても全体的に満足の行く内容になったと考えている所存です。

■第二次国連海洋法会議

会議監督: 松倉潤

【会議概要・目的】

議題は領海の幅及び漁業範囲の問題です。

いまだ国際社会で定義されていなかった漁業範囲の定義について、また海洋法における諸問題についての議論を行い、その後、設定された海域の幅員を決める会議でした。

この会議の目的は、参加者に対して海洋法の専門家になってもらおうというわけではなく、あえてリサーチが難しい中で自国の国益をどのように見つめるか、会議が始まりどのように議論していくかという点を目的とした会議です。

前述した通り、今会議は 1960 年に開催された会議であるがゆえに、残っている資料というのは限られ、リサーチは難しい会議となりました。

そこでそれぞれの参加者には自国をどのように見つめるかということを重視したともに、いざ会議本番になれば、どのように会議を引っ張っていくか、コントロールしていくか、どう立ち回りながら議論していくかがポイントでした。

この会議ではリサーチし、自分で考えること、議論の中で、自分の意見を言い、人の意見を聞くことについてある意味経験を積むための会議でした。

【会議経過・成果】

会議成果としては、会議監督が想定した通りの順序・ペースで会議が行われました。一日目は主に漁業範囲の定義について、二日目は海洋法制度について様々な意見が出されつつ、幅員の議論に移りました。決議案作成には、主に領海 6 カイリ主張グループと 12 カイリ主張グループに

分かれたが、それ以外の意見を持つ大使も積極的にそれぞれのグループと交渉を行っていました。会議の成果としての決議は、残念ながら幅員の意見がまとまらず、採択できなませんでした。が、会議を行った成果はあったと考えています。

多くの参加者が積極的に議論を行うことが出来たので、質の良い議論が多かったです。また、新入生についても議論することに臆することなく積極的に自分が出来ることをやろうという意識がとても強かったのも印象的でした。

【会議総括・課題】

想定以上に多くの参加者が積極的に議論に参加することで、会議全体を通して、温度差がなく、参加者全員が議論に参加しやすい環境が整ったと思います。会議設計において“議論するための議論”を無くすと宣言したことで、参加者の意識として、実質的な議論をどんどん行っていくという考えが根付いていたと感じます。そのためリサーチを行った知識がフルに生かせる会議になったと思っております。

大学生活のせつかくの夏休みを使って会議を行うのだから、参加者の満足度の高い会議を作ろうと意識しましたが、参加者の反応などを見ていると達成できたと考えています。これも多くの参加者が積極的に議論を行った賜物であると思います。

課題としては、参加者を評価するのが難しいという点です。

多くの参加者が積極的に会議に参加したため、評価を下すという点はかなり苦悩しました。

■新生、あるいは復興民主主義体制を促進、強化・定着させる ガバナンスの取り組みへの国連システムによる支援

会議監督：上岡遼大

【会議概要・目的】

当会議では、政治的分野における国際協力や国際法の発達と法典化を促進し、すべての人のための人権と基本的自由を実現し、かつ経済・社会・教育および保険の分野における国際協力を促進するため、研究を発議し勧告を行うことを目的としていました。

国際社会における恒久平和を達成するためには、全加盟国の統治能力を担保することが必須になります。国家の統治のあり方やその能力をいかに向上させるかについて、そのための政治体制としての民主主義を目指す観点から行う会議となります。

そして同時に「国連」の限界に踏み込むような会議にもしたいと考えていました。民主化、もしくは民主主義の安定化は国内の要素が大きく関係するため、支援主体であり外部アクターである国連は副次的な影響力しか有しません。その一方で、国連下部組織による活発な活動や国際的な

圧力は、政府に民主化を決断させる重要な要素もなっています。民主化支援における国連の限界を認識したうえで、それでもなお平和のために議場全体で国連の可能性を創造するような会議を目指していました。

【会議経過・成果】

会議当日では民主化支援における国連システムの役割について議論し、「移行」段階終了の条件を議場のコンセンサスで条件化することが出来ました。「定着」段階終了の条件については条件が挙げられたものの、条件化において議論が紛糾したため、列挙されたものをコンセンサスで条件化することは本日の議論内においては出来ませんでした。会議全体を通して、論点においては根本概念・理念上の対立や民主主義の本質を問い直すような議論が見られましたが、議場全体としては建設的な議論が行なわれていました。

国連の民主化支援の議論において大きな争点となってきたものが「国家主権・内政不干涉原則」との兼ね合いでした。「移行」段階終了の条件に「言論・思想の自由」が条件化されたことにより、一見、民主化の移行段階においては国連の民主化推進派の意見が強く反映されたように感じられますが、その前提として民主化において国家の共通の目的は各国の国民の民意を反映させることであるが、民主化そのものは、各国の自由な裁量に基づいて行なわれるものであるということが明確に大前提として議論内の文脈で定まったことは注目に値します。民主化支援の議論における「国家主権・内政不干涉の原則」との兼ね合いの議論は過去の議論からの進展がなかったように思われます。

【会議総括・課題】

参加者の大半が全国大会に初めて参加する 1 年生であることを鑑みると、時間内に決議案を作成し、最終的に一本化を経て合意に至ったことは素晴らしい成果であったと考えています。しかしその決議案は具体的な研究の発議や政策の勧告を含むものではなく、そのような抽象的な合意形成のみでどれだけ世界を変えられるのかについて疑問符が残る結果となりました。今後の模擬国連活動を行っていく上で、抽象的な意味内容を抽象的に議論するという頭の使い方が重要になってきますが、ある問題点の表層のみに触れることに満足するのではなく、問題を構造的に分析し真に解決する手段について議論してもらいたいと考えています。

■キューバ危機

会議監督：植杉裕子

【会議概要・目的】

1945 年。二度に渡る大戦が終わり、世界はようやく安寧と秩序を取り戻すかに思われていました。しかし、大戦の勝者である連合国が内包していた資本主義と共産主義という二つのイデオロギーの間にはいつしか修復不可能な溝が生まれ、これに伴いアメリカとソ連という二つの超大国を盟主として、世界は再び分裂したのです。これが冷戦でした。

バルトのシュテッティンからアドリアのトリエステまで、ヨーロッパ大陸を横切る鉄のカーテンが降ろされた。

大戦時のイギリスの首相ウインストン・チャーチルは冷戦の始まりをこう表現しましたが、時代が下るにつれて次第にヨーロッパから世界全土に鉄のカーテンによる分断は波及していきました。

二つの陣営は雪解けと緊張を繰り返しましたが、その溝は埋まることも、そして両陣営による直接的な戦争に発展することはありませんでした。なぜなら、二国にはどうしても直接戦争に踏み切れない理由があったのです。それは核兵器の存在でした。人類は既に、ボタンを押すだけで世界を滅ぼす手段を手に入れていたのです。皮肉なことに、その恐怖がこの二国の飽くなき欲望をすんでのところで食い止めていたのです。しかし、その緊張が最大に高まった事件がありました。それが今回の議題で扱うキューバ危機です。1962 年 10 月 14 日からの 13 日間は終末に最も近い 13 日間でした。それは、アメリカ空軍の偵察機が建設途中のソ連のミサイル基地をキューバに発見したことから始まりました。アメリカの隣国であるキューバにソ連のミサイルが配備されることは、アメリカ本土が射程範囲に入ることを意味します。そのため、当時のアメリカ大統領 J.F.ケネディは、テレビ演説でキューバの海上封鎖を宣言しました。一方ソ連は、既に武器を積んだ船をキューバに向かわせおり、刻一刻と封鎖ラインに接近させていたのです。しかし、ついに直接衝突は起こりませんでした。ソ連が武器を積んだ船を撤退させたのです。

かくして、冷戦時代最大の危機と言われるキューバ危機は間一髪、大惨事になることを免れました。しかし一体なぜ、いきなりソ連の船は撤退したのでしょうか。そこには、J.F.ケネディとフルシチョフとの水面下における限界状態での交渉がありました。今会議で再現してもらいたいのは、この交渉です。

1962 年 10 月 16 日から 28 日までの地獄の 13 日間を当時の幹部になりきって演じてもらいたいと考えております。勿論、歴史を変えてもらっても構いません。

目的としては、参加者には、思考力と行動力を得てほしいと思います。この会議は、変数が多

いという会議設計上の仕組み、キューバ危機という議題の切迫した状況という二つの要素から、思考を深化させることが必要不可欠です。

さらに、会議のコンセプト上、会議で勝つためには、会議の序盤、もしくは準備段階でどれだけ自分の優位性を担保できるかという戦略も重要になります。しかし、事前準備を頑張ればそれでいいかというとそうではなく、議場についてからもクライシスがあるため、議場を制するには行動力も鍵になります。

以上のように、この会議は思考力、行動力の双方を必要とする会議設計なので、参加者はこの両方の力を身に付けることができるでしょう。さらに、米ソ異なったタスクを用意したり、メンター制度を導入したりとフロント陣による綿密なサポートを受けやすい環境に整えます。

この会議は、あらゆる立場の人間があらゆる角度から1つの歴史的イベントについて議論するという王道を往く模擬国連であると同時に、その変数の多さから楽しみつくそうと思えば幾らでも楽しみつくせる会議であると思います。

【会議経過・成果】

結論から言うと、キューバが火の海になり、ベルリンも戦禍に苛まれました。

しかし、この結果は大使が突拍子もない行動をしたからという訳ではなく、むしろ大使が戦略を持って会議行動をしたが故に起こった事です。

まず、一日目には史実と異なりソ連がキューバにミサイル基地を配備したと述べました。これは、ソ連側のアメリカ牽制の意図があったと思われます。この先制パンチによりアメリカは後手に回らざるを得なくなりました。そして、ソ連の先制パンチを受けてアメリカは海上封鎖を発表しました。すると、軍事力の格差から直接戦闘を避けたいソ連は海上封鎖線へ向かうソ連の船を停止させ、代わりに勝算のある西ベルリンを条件付きで封鎖しました。ソ連側は海上封鎖に対する対抗措置として、西ベルリン封鎖を行ったのでした。その結果、当然ながら米ソの緊張は高まり、西ベルリンに米軍の傍受機や核を積んだ米軍の戦略爆撃機が飛ぶ事態となりました。

一方、直接的な行動と同時に交渉も行われていました。

この時の水面下での交渉の両国の主張は以下の通りです。

ソ連側「アメリカの海上封鎖を受けて西ベルリンを封鎖した。アメリカが海上封鎖を解くならば、西ベルリンの封鎖をやめよう。」

アメリカ側「アメリカが海上封鎖を行ったのはソ連のキューバへのミサイル基地配備を受けてのことである。まず、根本の原因であるミサイル基地を撤去してもらいたい。」

しかし、結局両者は譲らずに交渉は決裂。二日目に突入しました。

二日目の冒頭でフロント側のアクターであったカストロがソ連に対し弱腰の態度を詰る演説をしました。これによりキューバ軍と駐玖ソ連軍は一時軍事衝突する事態になりました。これを好機と見

たのがアメリカです。アメリカはキューバとソ連との国交が断絶したと見るや否やキューバに対する空爆を開始しました。結果、キューバ軍及びミサイル基地はほぼ壊滅状態、一部ソ連軍にも被害が及びました。

そして、それからすぐにソ連が西ベルリンを占領しました。結果、西ベルリン封鎖の為に派遣されていた米軍は二割まで落ち込み、空中では米英西独 NATO 軍対東ドイツソ連軍の熾烈な制空権争いが繰り広げられました。

そして三日目、事態を終結させるべく度重なる水面下での交渉が行われ、最終的に首脳会談が行われました。この時の状況はまさに核戦争手前でした。というのも NATO 軍は、ライン川およびハンブルクを最終防衛ラインとし、これ以上ワルシャワ条約軍及びソ連軍を超えると、戦術核の使用も辞さないという命令書を出しており、ソ連側は首脳会談が決裂した時点で核の使用を許可する案を通していたからです。

結果、間一髪のところまで停戦合意が妥結。西ベルリンが核の炎に包まれる危機は逃れました。そして、会議自体も停戦合意が終了した時点で時間切れとなりました。

以上が、今回のキューバ危機会議の会議経過です。

会議成果として、外交ゲームの如実な体现を挙げます。というのも、交渉と軍事侵攻のバランスが上手く機能していたからです。アメリカ側を例に挙げると、軍人がキューバないしベルリンへ軍事行動を行い、文官が事態を終結させるために、あるいは有利な条件で交渉を進めるために水面下で交渉を行っていたところです。

「戦争は政治の手段である」というクラウゼビッツの有名な思想がありますが、今回の会議はまさにこの思想を体现していたと思います。すなわち、軍人が軍事行動をするのは自国の状況を有利にするための政治的行為の一形態であり、文官が交渉するのも自国の状況を有利にするための一形態であったということです。そのため、内政的な事情による偶然の部分もあるとは思いますが(今回の会議のアメリカ文官の交渉は暴走する軍部を牽制する意味合いも大きかったようです。ソ連側は合議でこのバランスを図っていたように思えます。)、結果としてうまく噛み合い外交ゲームとしてハイレベルな戦いを体现していたように思えました。したがって、今回の会議で得られた成果は、外交ゲームの如実な体现だと思っています。

【会議総括・課題】

今回の会議は概ね成功であったと思います。私が成功であったと判断するポイントは2つあります。

一つは今回設定した会議テーマ、「ゲーム性の追求」が達成できたということです。私が設定した「ゲーム性の追求」とは、簡単に言えば、各参加者が個人益という目的を持って、戦略及び戦術を

用いて設定した目的を達成していくというものです。

メンターで会議参加者と直接話をした所感、実際にアメリカ・ソ連双方の議場を三日間見ていた所感から述べますと、各々担当の人物として達成すべき目的を持って会議行動を行っていたように思えました。そして、戦略・戦術についてもアメリカ・ソ連の決定及び各人の議場内の主張が的を射たものであった点、一部は瞠目するようなものであった点から、よく考えられており緻密に練られていると感じました。

もう一つは、会議参加者からの「楽しめた」という声が非常に多かったことです。会議作成理由として私は自分がでて楽しいと思えるような会議を作りたいからというのを挙げました。したがって、できるだけ自由にやりたいことをやれる環境を提供しようと考えていました。そのため、出せるコマンドからプラモデルの持ち込みまで会議設計が破綻しない限りはなんでも許容しました。すると参加者は私の予想を遥かに超える生き生きとした会議行動を行い、それが会議をさらに面白くさせていたと感じました。私の模擬国連で活動する原点は、「楽しいから」です。実際だったら動かすことのできない国を動かせたり、実際には変えることのできない歴史をかえることができる活動が楽しくて模擬国連に入りました。したがって、「楽しめた」との声が多かったのは、純粋に会議監督冥利に尽きました。

今後の課題は、今回の会議に限定して言えることと、模擬国連全体について言えることがあります。

〈今回の会議〉

まず、今回の会議に限定して言えることは、会議設計が甘かった部分があったことです。具体的には、会議の変数としてコマンドというシステムを採用したのですが、コマンドを受理する基準が広すぎたため優先度の低いコマンドに気を取られ、優先度の高いコマンドの処理が遅れたことと、膨大なコマンドの処理に追われ会議監督の本来の役目である会議全体を把握することが遅れたことです。このために、一時的にはありますが、会議が停滞したり、会議監督自身のキャパシティを超えたりというトラブルに見舞われました。

したがって、効率よく会議を運ぶにはコマンドのシステム化をする必要があると考えました。コマンドのシステム化とは、今回の作り上げてきた会議設計と今回の会議設計で見えてきた会議設計の穴を補う手段を体系化するということです。

会議設計の穴を補う手段とは、例えば、出でくであろうコマンドの中で優先度の高いものを会議準備段階で予測し、優先度の高い順に処理していくとか、出てきたコマンドを種類別にノートにまとめ、一目で何が起こったか分かりやすくする、コマンドを処理する時間を考慮しターン制にするとかです。さらに細かなことを挙げれば、議場時間(今回は一日＝一時間で設定していました)を把握しやすくするために議場時間に合わせた時計を設置する、戦況を分かりやすくするために両国が

見える場所に大まかな戦況が分かる図を設置するという対策を取れば会議がさらに効率よく運んだと考えます。

〈模擬国連全体〉

模擬国連全体について言えることは、模擬国連のクライシス会議の更なる開拓が必要であるということです。

クライシス会議とは、今回のキューバ危機のように刻一刻と状況が変わっていく会議のことです。一つの国連の会議を模擬するいわゆる「模擬国連」とは異なりますが、国際政治・外交を模擬するという意味ではクライシス会議も模擬国連の範疇に入ります。

私はクライシス会議こそ、よりリアルな国際政治・外交を体現できるのではないかと考えています。いわゆる「模擬国連」ではロジックの整合性に焦点が置かれがちですが、クライシス会議ではロジックの整合性は一手段にすぎません。クライシス会議では、背後に潜む武力や美味い交渉条件に焦点が置かれます。実際の国際社会においても、実行力が担保されなければどれだけ立派な国連決議でもあまり意味のないものとして捉えられます(国際連盟時代の多くの決議がそうであったように)。そして、実行力は多くの場合各国の力によって担保されます。したがって、各国の力の部分に焦点を置いている外交ゲームとしての側面の強いクライシス会議は、今まで以上に広く国際政治・外交を捉えることができるのではないかと考えます。

以上より、私は模擬国連全体の課題としてクライシス会議の更なる開拓を挙げます。勿論、国連決議が国際社会に与えてきたものは甚大です。国際社会の意思表明、各国の合意形成に国連決議が与えた影響は計り知れません。したがって、いわゆる「模擬国連」を否定するつもりはありません。しかし、一方で模擬国連の役目の一つに国際政治・外交を体現するというものがあるのならば、クライシス会議の開拓は必然の物であると考えます。そして、クライシス会議は様々なところで行われる試みがあるものの、議題のバリエーションについてはまだまだ発展途上です。したがって、国際政治・外交を考えるサークルとしての模擬国連のこれからの課題はクライシス会議の開拓であると考えます。

■World Conference on Human Rights —Vienna Declaration and Programme of Action— 世界人権会議 —ウィーン宣言及び行動計画—

会議監督: 豊田海渡(神戸大学・3年)
久保明也(東京大学・2年)

【会議概要・目的】

2017年の日本において、「人権はすべての人間が生まれながらにして持つ権利」であることに

疑問を持つことはもはや許されないことといっても過言ではないでしょう。「労働者の権利」「女性の権利」「エスニックマイノリティーの権利」「障害者の権利」「LGBTs の権利」など、今日の社会で人権が用いられない文脈を探すほうが難しいのではないのでしょうか。しかし、ヘイトスピーチをはじめとして、相模原市の障害者福祉施設で起こった殺傷事件など、偏見や差別、痛ましい事件は後を絶ちません。現代でさえ、我々にとって人権がいかなる場合でも普遍的なものなのか？人権は誰によって守られるのか？そもそも人権とは何なのか？という問いが残酷にも我々の眼前に突き付けられています。

一国内においてさえ、唯一の解を見出せない人権の問題は、国際社会では、なお一層論争をよび、修復不可能とも思われる対立を生んできました。対立が頂点に達したのは 1993 年にウィーンで開かれた世界人権会議です。171 か国と約 1500 の NGO が参加したこの会議では、東西対立の冷戦構造が崩れるなかで、各地で激化する民族紛争や広がる南北の経済格差などの現状を踏まえて、国連が「人権」にどう向き合っていくかが問われました。各国の主張は錯綜し、会議は難航を極めました。人権の保護と促進を強調したい欧米諸国と、人権の美名に名を借りた国内問題への干渉に反発し、独自の人権観を持ち出す途上国の対立はあまりにも深く、「人権は普遍か」「人権の保護と促進は“国際社会の正当な関心事”か」「人権高等弁務官を設置するか」などを中心に激論につぐ激論が交わされました。史実では会合最終日の 23 時 55 分になんとか合意文書の採択にこぎ着けました。

個別の人権問題がよく議論される現代だからこそ、ラディカルに自身の常識や価値観を徹底的に疑い、最善策を導き出してほしいとの思いから今会議を設定しました。

【会議経過・成果】

本会議は、各国による公式演説の時間→宣言案作成を目的とした討議・交渉の時間→投票という流れで行われました。それぞれ説明を加えます、

序盤には各国がスピーチを行い、実際に論点となる「西欧で発達してきた概念である人権は世界全体で普遍的なものと言えるのか」や「社会、経済の発展の度合いは人権の保護と促進にどのような影響を与えるのか」、「元来国内事項として捉えられてきた人権問題に、国際社会はどれだけ干渉できるのか」についての意見が表明されました。その後会議は実質的な議論を始めるために、数ある争点についての各国の意見をどのようにまとめ、そして合意を形成していくのかという方法論を巡り紛糾していくこととなります。議長のファシリテーションもあり、一日目の終盤には実質的な議論に入り宣言草案に対する意見出しが進みました。

二日目は会議開始から一定の前進を見るかに思えました。昨夜のうちに各国がドライブで宣言草案に対する意見付けを行った結果 150 以上の修正提案が乱立し、それを受けパキスタン大使が類似意見を持った大使間でその解消、統一を行うという提案を行いました。これが可決され、議

場はその実行に当たるため自由交渉時間に入ったのですが、交渉時間が終わりふたを開けてみると、各々が行っていたことに相違が生まれ、当初想定の流れからの逸脱への道を歩んでいました。

その後議論は紛糾し、会議は灯台を見失った状態で闇の中を進んでいきます。これは、議論の流れを提案した大使、進行していた大使、そして流れを修正できなかったその他の大使全ての責任でしょう。議論はなされたものの、会議全体としての合意を作り出すという目標に資する議論が行われたとは決して言えませんでした。

三日目に入り、事態は急展開を迎えます。全大使が着席しての議論というものは行われず、自由な交渉の中で最終合意文書の一つ一つの文言についての精査、議論、バーター取引などが行われました。2日間停滞しがちだった各論点の議論が一気に促進され、急ピッチで最終合意案が出来上がりました。結果的にその最終合意文書がコンセンサスで採択される結果となり、会議は閉幕を迎えます。

この最終合意文書について分析を加えます。最終合意文書は、史実で採択されたものとは大きく異なっていました。全体的にアジア、イスラム国家の主張が多く取り入れられ、国際人権について考える際には地域的な特殊性を考慮する必要があることが明記され、また人権の普遍性についても、表記は「人権には普遍的性質を含むものが存在している」となっており、人権の普遍性や相互不可分性といった文脈で大きな後退を示すこととなりました。しかし、この「後退」というもののどの立場からのこういった動きを指しているかについて、参加者は非常に重要な視座を獲得したのではないかと思います。それはつまり、「進歩」「発展」「後退」といった言葉は、それを判断する主体によって大きく意味が変わるものであり、ある事象を一概に判断することは難しいということがあります。今回であれば、一般的に見れば人権は「後退」したように見えるかもしれませんが、これをアジアやイスラムの立場から判断してみると、今まで比較的西欧的な価値観が強く反映され、ある種それをその他の地域の国々が受け入れる形で機能していた人権が、本当の意味で各国の価値観に目を向けた国際人権として再構成されていく流れの一步だと捉えることもできます。ある物事を一面的に捉えるのではなく、多角的に捉えられ他者理解を助けるという模擬国連の一側面を垣間見た気がします。

一方でこれらの言葉が最終合意文書に残ってしまったことを西欧諸国は強く反省するべきでしょう。彼らの立場からすれば、先人たちが積み上げてきた国際的な人権保障の今までの歩みは明らかに「後退」したと捉えられるからです。妥協を見出していかなければならないけれども、譲ってはいけない部分は守らなければならないという交渉は非常に難しいですが、その実践ができなかったことが悔やまれます。

【会議総括・課題】

会議総括として議論の流れについてと交渉について、二点述べ最後にまとめます。

まず議論の流れについてですが、本会議では一日目及び二日目の多くの部分を有効に活用できたとは言えない結果に終わりました。人権という非常にラディカルな問題について、世界全体での合意を作り出し、それを文章化して採択するわけですから、議論の方法、そしてそれを文章化していく方法の一つ間違えるとゴールは大きく変わってしまいます。今回は、大使からそういった方法論についての提案がなされ採択を行い、その提案に基づいて会議が進行しては、その流れから脱線した別の議論方法・内容が提案されるということが繰り返されました。こういった提案、脱線の繰り返しによって膨大な時間が浪費され、十分な討議の時間や交渉の時間が確保できなかったことは最も反省すべき点の一つでしょう。こういったことで時間が浪費され、適切な議論のプロセスを経ずに時間が経過することは、全ての国の大使にとってマイナスだったと思われますが、全体的な議論の流れを修正することができた大使は存在しませんでした。私が大使一人一人と話していると、なんとなく議論のプロセスや逸脱に疑問を抱いているけれども、それをわざわざ言語化する手間や、議論に水を差してしまうことへの恐れから、自分の中に留めてしまっている方が多かったように見受けられます。我々が学ぶべきは、思ったこと・感じた事を勇気をもってしっかり伝えることの大切さと、議論の流れやプロセスを自分事としてとらえることの重要性ではないでしょうか。

続いて、交渉について述べます。本会議はそのコンセプトに「論理の先にあるもの」を掲げています。これは、論理を詰めてディベートをするだけでは国際問題への答えを見つけることも、自国の主張を相手に受け入れてもらうこともできないという問題意識から出てきたものでした。そのため、参加者には自国の主張の正当性を支える論理をしっかりと用意してもらいながら、それを相手にどのように伝え、自国の主張を受け入れてもらうのかという交渉の部分に重点を置いて会議準備をしていただきました。実際の交渉では、一方的に自国の主張を展開するだけではなく、他国がどういった主張をしていて、その妥協点についてもある程度想像がめぐらされた交渉が展開されていました。しかし、時間的制約もあり、妥協を急ぐあまり自国の理想の追求がおろそかになっている大使が多く見受けられました。交渉では、妥協点を想定しておくことで優位に議論を進めることができますが、それは最初から妥協案を提示することではないはずです。落としどころを頭の中で意識しながら、そのラインよりもできるだけ多くのものを得ようと努力することが交渉の目的であると私は考えます。参加者各位が学んだ教訓は多いのではないのでしょうか。

会議全体を振り返りますと、各大使はしっかりと会議準備を行ってくれ、その質・量ともに素晴らしいものであったと思いますが、会議においての実行に少し難があり、議論プロセスに混乱が生じ、それを修正できないまま三日目に入り、急ピッチで文言調整を行い採択を行ったという経過になりました。合意に至るまでの流れ、交渉の過程といったところに後悔や反省が残る大使は非常に多いのではないのでしょうか。会議監督としては、この会議での教訓を生かして、参加者の皆さま

が今後模擬国連で成功していったら幸いです。

■ Developments in the Field of Information and Telecommunications in the Context of International Security

会議監督：南綾香

【会議概要・目的】

世界を揺れ動かし、ISの誕生にも繋がったアラブの春においてインターネットやSNSが大きな役割を果たしたといわれている。ネットへの規制等強化する政府も増えた。そのような流れの中 2011 年頃から、様々な場でガバナンスの観点からサイバー空間の在り方について議論がなされている。世界を変え、急速に発展させるとともに世界を大きな混沌に陥れたサイバー空間をいかに扱うべきか、人々に秩序を与え統治する政府の立場から考えてみてほしいという想いでこの議題を設定した。

会議概要としては、今会議では実際の国連総会第一委員会が”Developments in the Field of Information and Telecommunications in the Context of International Security”という議題で行っている議論の実質的な形式を模擬した。具体的には、3日間の関西大会の議論の中に政府専門家会合と総会を混ぜ込んだ。現実において、専門家会合ではサイバー空間についてより具体的な議論がなされ、その結果が非公式レポートとして提出される。総会の議論はそれを基に行われ、実質的にはレポートのフォローアップになっている。この会議ではその流れを模擬し、まずレポートを作成し提出してから総会の議論の結果である決議文書を作成するように設計した。

そうすることで、非公式文書であるレポートの内容を参照した決議文書を総会で出してレポートの内容に効力を持たせることを可能にし、さらにより具体的な議論をしなくてはいけないと参加者に意識してもらいやすくなった。

ただ、実際に大会では時間がかなり制限されているので、レポートにおいては第四回の政府専門家会合のレポートの内容の変更に徹してもらうようにしました。

論点は、主に二つ設定しました。一つ目は、サイバー空間における国家の責任ある行動規範をどうしたらより効果的にでき、国際社会に残していけるかということで、二つ目は、キャパシティービルディング、国際協力についてです。

一つ目の論点については、第四回のレポートの三章に各国家の規範について書かれているので、その章を重点的に変更してもらう形にしました。必要があれば、他の章も変更可能ということにはしていました。

二つ目の大論点である国際協力については、主に決議文書の中で文言を作成してもらうつもりでした。なぜなら、実際にどのように途上国を支援するのかを明確にして決議に残さなくては実行されず意味をなさないからです。ただ、第四回のレポートの第五章にキャパシティービルディングに

ついて書かれたところがあり、その変更も認めました。

【会議経過・成果】

初日から専門家会合と総会を混ぜ込んだ形式に戸惑いをみせる参加者も少なくなかった。そのため、会議の最初の 20 分は改めて会議設計について説明し、質疑応答をする時間に設定した。だいたいの方は全員がそこで理解してくれました。しかし、それから皆どのように議論を進めればよいのか迷い、全体的に迷走してしまいました。

そこで UK 大使と US 大使がシットティングコーカスを提案し、第四回 GGE のレポート第三章の文言について意見を募集しまとめる作業に入りました。

一旦議論の道筋が見えたかのように思えましたが、秩序なくばらばらに各大使が意見を出していき、意見出しが終わった後にどう議論を進めていくかで再び迷走してしまいました。意見が出された文言ごとにリーダーとなる大使を決定しグループを作って議論を進める方法と既存の文言を変更していくチームと新しい文言を作成していく方法と全体的な意見やスタンスが似た大使同士でチームを作り別々のレポートを作成する方法の三つが提案されました。結局二番目の方法が投票で選ばれ、その後は二つのグループに分けられました。一日目は既存の文言を扱うグループと新しい文言を扱うグループに完全に分かれて作業が進み、議論や文言作成作業の進捗が共有はされませんでした。前者のグループにサイバー空間上でも表現の自由と情報へのアクセス権利を重要視する西欧諸国が集まり、後者のグループにサイバー空間においてある程度情報をコントロールすべきだと考えている中国やロシアなどの国が集まりました。

二日目、最初のセッションでそれぞれのグループが作業にめどをつけ、会議開始から 3 時間ほどで共有の作業が終えられました。その後は、大きな一つのグループとして作業が進められました。文言は具体化されていきましたが、レポートと決議案文書草案の提出締め切りが迫っていたために半ば無理矢理にまとめられ提出が行われました。

レポートは提出後自動的に全会一致の内容であるとされるために、最後は文言の削除等も行われ、全ての大使の了承を得ることに皆苦労していました。

レポートの提出後、決議文書草案の作成に移りました。

西欧諸国の思惑が濃く反映され、中国ロシアサイドの意見は反映されない流れになってしまいました。二日目の後半になってから中国大使が少しずつ動き出して、中国側の意見に賛同してくれる大使をさがし、別のグループを作りました。締め切り時間までに二つのグループから決議案が提出されました。

決議案が提出された時点では、文言は曖昧なものばかりで実行力に欠けていました。また、サイバーセキュリティの向上のためには全ての国が協力しなくてはならないため、全会一致での採択が望まれていました。そのため、決議案の提出後は意見の違う大使同士の交渉と文言の具体化

が課題でした。

決議案が提出され、全大使に共有されたのは 18 時頃で残された時間は2時間と3日目のわずかな時間でした。

決議案提出後、どこまで文言を具体化すべきなのか、どの文言を変更すべきかについて全体で議論がなされました。

3日目の朝には具体化され文言案がでそろい、最終の決議案が作成されていきました。中国、ロシア、アメリカが急に具体化しすぎであると主張し反対し続けていました。しかし、交渉がすすめられ文言の一部を削除したり変更したことで反対の声は抑えられました。

最終提出の際に、中国が勝手にスポンサーに入れられてしまうミスがあるなど、参加者間での問題も起こりましたが、なんとか最終決議文書案が提出されました。

中国大使は自身の意見があまり反映されていないことに憤りを示していましたが、国際益とこの会議で成果を残すことを優先し、反対はしませんでした。

最終的には、反対なし、棄権一国、その他賛成で差採択されました。

【会議総括・課題】

まず、会議の成果物であるレポートと決議文書の文言は非常に良いものができました。曖昧な言葉が使われている部分には、しっかりと例や具体策が示されています。例えば、最初に提出された決議案の中で、途上国に対してサイバーセキュリティのガイドラインを配布しよう、IT 技術の教育を提供しようという文言がありました。それだけでは、誰がそのプロジェクトの実行主体になるのかもわかりませんし、具体的にどんな教育をどこにするのか何の指針も示されていないので、文言の効果は薄いです。最終的に提出された文言では、実在の国連機関に言及し実行主体を示したうえで、サイバーアタックを受けた場合の対処法をまとめ、国際法が規定する規範をもとにしてガイドラインを作成する等、ある程度具体化された文言ができており、質は悪くないものになったと思います。

次に、会議の流れはほぼ想定通りに進みました。中国側とアメリカ側で意見に相違がでて、決議案は二つ提出され、最終提出までの残り少ない時間で意見の相違を乗り越えるべく議論交渉が活発に行われ採択に向かうという流れを理想としていました。その通りに会議はすすみ、参加者は実質的議論も行えていたので非常に良かったです。

ただ、会議の序盤は非常に不安でした。この会議の参加者は模擬国連初心者がおおく、また外国人参加者が半数を占めていました。そもそも国連ができることや一般的な決議における文言の具体性のレベル等に対する考え方や価値観が日本人参加者と外国人参加者で大きく違ったことと国連や模擬国連のプロシージャを理解できていない大使がいたことで、何度も議場が混乱した

り、プロシージャに関する質問や異論がとぶ時間が長くなり議論の時間を短くしてしまったりしました。

最終日は、決議案の最終版が提出されるのかどうか非常に不安でした。提出時に、データが間違っていたり、スポンサーに勝手に名前を入れられた国がいたり、議論中に起こって議場をでる大使がいるなどトラブルも多々ありました。それでも、具体化された決議案がまとめられて提出され、反対なしで採択されたことは私が設定していた理想状態に近いものであり、ボトムは達成されたため、非常に嬉しかったです。

今回の反省は、外国人参加者や初心者に対するサポートや連絡をもっと頻繁に細かく行うべきだったということです。模擬国連の進め方や実際の国連のシステム等について理解があさく、それが原因でもめごとになったり会議が遅れたりしました。そのため、事前に国連システムや模擬国連の進め方やプロシージャについて詳細な解説を加えておくべきでした。

おそらく、参加者がもっとも困難だったのも、実際の国連のシステムや決議、模擬国連の細かいプロシージャを理解することと、それらを同じレベルで同じように理解しているわけではない状態で相手と議論をすすめていくことだったと思います。

しかし、やはり最終的な成果物はいいいものができたので、総合的には成功した会議であったと思います。

■万人のための持続可能なエネルギー ～持続可能な開発目標(SDGs)Goal 7 実現へ～

Sustainable Energy for All

～How to achieve Goal 7 of the Sustainable Development Goals～

会議監督: 佐伯壮一郎

【会議概要・目的】

時、2015 年 5 月 15 日。世界中において、「エネルギー」はなくてはならないものとなりました。しかし、世の中にはエネルギーを享受できていない人々も数多く存在していることもまた事実です。このような状況を打破するため、2015 年 9 月に採択される持続可能な開発目標[Sustainable Development Goals (SDGs)]の Goal 7 において「万人の安全かつ持続可能な近代エネルギーへのアクセスの保障」が策定されようとしていました。

エネルギー問題は、開発、金融、技術発展、環境問題など近現代の社会の特徴が凝縮された議題です。2030 年までに世界が持続可能な発展を遂げ続けるためのエネルギー開発政策を、SDGs 採択を控える今、政府レベルの視点から、参加者の高校生たちに評価、協議していただきました。翌日には、世界の様々なステークホルダーが年に一度だけ会する Sustainable Energy for All Forum の開催が控えているという設定の下、その事前交渉として、会議に参加する大使たちに

は次につながる満足のゆく政策を立案し、議論を交わしていただきました。

本会議の目的は、まず第一に、参加していただく高校生の皆様に、模擬国連の楽しさを体感できる会議を提供することでした。それを実感しながら、担当国の視点に立ってロジカルかつクリエイティブな政策立案をし、それを密度の濃い協議のもとで検討していけるようサポートをフロントが誘導いたしました。会議を通じて交渉や公式発言を行い、決議案を執筆していくことを通じて、今までにはなかった世界を多義的に見る視点を養う機会にしようと考えておりました。

日本では、実に大半の児童が教育を受けることが出来、小中高とその教育は1本線でつながっています。しかし、模擬国連で養われるこれら多面的な能力は全く別種的能力であり、同時に世界で戦うには必須の能力となります。勉強会や会議への準備ではそのような「頭の使い方」を参加者に伝授することを念頭に置きました。

世界を見る目が変われば、自らを見つめ直す目も自ずと変わるだろうと考えられます。この会議を通じて、同世代の価値観や世界情勢などに主体的に触れ、自らの人間観、価値観の構築に役立てて欲しいと考えました。

さらに、SDGs が最終局面を迎える 2020 年代後半は、本会議に参加する高校生たちが社会人としてそれなりのポストに就き、活躍し始める頃だと思えます。そのときに、2017 年の夏、神戸にて議論した内容を思い出し、社会を別の側面から観察し、更なる社会貢献へと会議参加者が、世界レベルの一步を踏み出せるキッカケとなることを期待いたしました。

【会議経過・成果】

すべての参加者のうち約半数が模擬国連会議への参加が初めてであるという状況の中、ほとんどの参加者が積極的に発言を行うという極めて画期的な開始を会議は呈しました。初めは模擬国連独特のルールがわかっていなかった参加者も、何度か経験を持つ参加者に引っ張られるように、徐々に慣れてくると自らの政策を意気揚々と議場に対し説明するようになりました。

会議の設計といたしまして、まず、「SDGs におけるエネルギー開発」というテーマにおいて、「水平的平等」「垂直的平等」(ともに造語)という概念を用いながら、どのような指針に基づいてエネルギー開発を行うべきか、という抽象的な議論を行っていただきました。抽象的な議論にあまり慣れていない参加者も多く、どのような表現や言葉遣いを用いるべきか戸惑っている参加者も見受けられました。しかし、最終的にはフロントの援助を必要とせず、抽象的な概念に関する一定の合意がなされ、成果文書に記載がなされました。

抽象的な議論が終わったのち、その抽象概念をどのように「具体化」するか、という議論がなされました。本議論では、各国大使が持ち寄った政策を共有し、合意が得られたものから決議案として記載していく、という方針が取られ、2つの決議案が提出されました。ただ、この段階での決議案のクオリティは決して高いものではなく、決議案の質をあげ、なおかつ決議としての体裁に近づく

よう、フロント側から、「論理構成」「文体」という2点についての修正を誘導いたしました。決議案の修正に一部大使が奔走する中、この2本の決議案をコンバインして一本化するという交渉がなされましたが、時間内に合意は得られず、決議案が2本のまま、投票にかけられることとなりました。投票においても、それぞれの決議案が、当初目指していたコンセンサス採択で可決されることはなく、双方ともに点呼式投票にて賛成多数にて可決されました。

上記の通り、会議を通じて、SDGsにおいて、世界がどのようにエネルギー開発を推し進めるべきかという議論がなされ、成果文書を通じてその方針が全世界に示されました。具体的な取り組みを求める成果文書が採択されたことで、専門家たちの議論がどのようなことを中心に議論がなされるべきかが示されたという点では、本会議の大きな目的は果たされたといってもよいでしょう。

初心者が半数を占める中でここまでも積極的な議論が行われたことは、ひとえに参加者の事前準備の成果であると考えます。会議の準備としてリサーチを誘導したタスクでは、ほとんどの参加者が最低1回は提出をし、フロントによるコメントを受けながらリサーチを進めていました。設問を通じて模擬国連ではどのようなことを調べたうえで会議に臨むべきか、また、情報をどのように解釈し、どのような考察を事前に加えるべきか、といった点が一定の理解を得られたことで、具体的な交渉が会議中も積極的に進んだと考えられます。その点では、すべての参加者が各々、多方面における成長を遂げ、称賛に値する活躍を示してくれていました。

【会議総括・課題】

会議の質を講評するのであれば、本会議の質は、高校模擬国連の会議としては極めて高いものであったと考えております。高校模擬国連では長期的な準備期間を取ることが難しい場合が多いですが、本会議では2か月余りの準備期間、そしてその準備を誘導するタスクと議題概説書により、長期間にわたる質の高い準備ができていたからであると考えております。

しかしながら、大学生を主体とする会議と比較をすれば、本会議のレベルは決して高いものであったとはいえないと思います。大使として会議に挑むに当たり、発現ではどのようなことに気を遣うべきか。国際情勢をどのように踏まえねばならないか。自分の意見と国としての意見をしっかりと分けること。特にこのような、いわば模擬国連に挑むあたりの「根本的なスタンス」というものに関しては、極めて改善の余地があると捉えております。

ただ、本会議においては、そのような国連の「模擬」といった部分よりも、「頭を使う」こと、そして、「協調を目指す会議行動を実現する」ことを中心に考えてもらうことを優先したため、その軌道修正を加えることはしませんでした。このような点はおそらく知識並びに経験に基づいて構築されるものであり、それをこの時期に高校生に求めるのはいくらか酷なのではないか、とフロントとして判断いたしました。

そのような意味では、2つの決議案が出て、双方がコンセンサスで採択されなかったのは、ある

意味好意的に認識することも可能かと思います。一部の大使が頭を使ってくれたという現れとして捉えれば、会議は成功したと言えるのではないかと捉えているためです。

また、このような政策を提言していきながら議論を構築する会議を通じて、参加者も模擬国連の楽しさを理解していただけたのではないかと考えております(詳しくは参加者アンケートの結果をご覧ください)。リサーチなどといった事前準備や、会議において交渉を行っている間など、苦しい思いをどこかでした参加者も多かったでしょうが、それを乗り越えた先の達成感や自らが成長したという実感が、模擬国連の「楽しさ」や「充実度」に寄与しているのではないかと。会議を運営したフロントとして、会議を設計した会議監督として、また、高校模擬国連をこよなく愛し、普及を試みる個人として、この事実を改めて実感できる機会となりました。このような意味で、参加者だけでなく、会議運営陣としても、本会議は「成功」したのではないかと捉えております。

高校生会議を模擬国連会議関西大会に設置するのは初めての試みでした。そして、この会議は、大学生が高校生に対し、数か月にわたる「タスク」と呼ばれる事前課題、そして2日間にわたる会議とその講評を通じて積極的に参加者を育成する名目にて実施された、日本で初めての会議でした。

このような会議を設計するに至ったのは、本大会の「模擬国連を通じて人材育成を行う」という土壌と、高校模擬国連に対する需要の増加がマッチしたためでございました。数多くの高校生が全国津々浦々、模擬国連に参加してみたいと思っている状況が現在の日本にはあります。また、模擬国連自体が教育プログラムとして極めて高い評価を中等、高等教育においてなされるようになってまいりました。しかしながら、その需要にこたえるだけの指導者や機会に恵まれない中高生が、特に地方には数多く存在しております。そのような意欲ある参加者に対する受け皿となり、さらに指導を行うことができる場として、大学生が実施する模擬国連の大会は極めて有用な機会でした。

本会議を実際に実施してみることで、高校生に対し、大学生が指導を行うことで一定の成果が収められたのではないかと考えております。しかしながら、運営面、特に資金面において、主催側の課題が多く残ることとなりました。

高校模擬国連は、会議参加者と主催者だけで成り立っているわけではありません。双方を支える強固な土台、特に、参加者の保護者や指導教員の皆様のご支援があって、初めて実現できるものであると、本会議を通じて痛切に実感いたしました。本報告書をご覧いただきました皆様には、この場をお借りいたしまして、引き続きより一層のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

本会議は、会議参加者とともに、運営陣も数多くの成長を実感できる結果となりました。このような機会を実現するにあたり、ご支援いただきました皆様、そして運営段階からともに会議と大会

を作成してきた運営事務局の皆様に、厚く御礼申し上げ、本会議の報告とさせていただきます。

■会議総括

研究統括：辻郷孔凡

第 17 回を迎えた本年度の模擬国連会議関西大会(The 17th Kansai Model United Nations Conferences, KMUNC17. 以下、関西大会。)は、8 つの会議に海外からも含め 250 人以上の参加者に、約 35 名の会議制作・スタッフ、そして 13 名の大会運営事務局を加えた総勢 300 名を超える大学生・大学院生並びに高校生が一同に介し実施されました。今年は大学生向けに日本語会議 6 つとここ数年恒例となっている英語会議 1 つを制作したほか、これまで大会当日イベントとしていた高校生向けの体験会議を他の会議と同等の扱いに引上げ、会場もアリストンホテルの会議室を用意し、大会の新規コンテンツとして実施しました。さて、本総括では、各会議に寸評を施したのちに、本大会の会議全体の今後の展望について触れ、締め括ることにします。

まず、学生向けの日本語会議 6 つについて述べます。まず、いわゆる「海洋法会議」と「民主化会議」、正式名称を「領海の幅及び漁業範囲の問題」、「新生、あるいは復興民主主義体制を促進、強化・定着させるガバナンスの取り組みへの国連システムによる支援」というこの 2 つの会議は、新入生の登龍門となることを狙って設計されました。広報戦略も的中し、参加者の 9 割近くが新入生となった両会議では、初心者である彼らへの会議制作側の熱心なサポートもあり、当日出席された「大使」が同じ志を持つ仲間と積極的に議論していく姿が見られました。

「世界人権会議」と「サンフランシスコ会議」では、それぞれ「ウィーン宣言及び行動計画」と「国際連合憲章」の一部の起草が試みられました。国際社会における最も重要な文書の文言作成に挑む両会議では、国際的な法政の知識は勿論のこと、各国の思想主義をより深く理解しなければならず、また実際の起草過程を調べつつも、「国益」ひいては「国際益」達成のため、先人の遺産以上のものを生み出すため知恵を絞らなければなりません。一国を準備過程から二人で行う「ペア・デリゲイツ制度」の実施の甲斐もあり、上級生と新入生が相互に刺激しあうハイレベルな会議となりました。

「キューバ危機」並びに「東南アジア情勢」では、「クライシス」と呼ばれるシステムが導入されました。それは、議場での決定がいままさに起きている国際危機に直ちに影響を与えるというもので、迅速かつ合理的な合意形成が求められます。前者の会議においては、参加者がケネディやフルシチョフのような当時の人物を模擬する「人割」を用い、よりミクロな臨場感が志向され、更迭やスパイ行為といった生々しい国際関係までもが模擬され、空前の盛り上がりを見せました。後者においては、大学院生の参加や卓越した会議制作もあって、最終日の終了 1 分前の決断が最優秀賞の行く末を左右する極めて緊張感の高い会議となりました。

関西大会では恒例となりつつある完全英語の会議、通称「英語会議」では、「国際安全保障の文

脈における情報及び電気通信分野の進歩」、いわゆるサイバーテロに対する「サイバーセキュリティ」について英語で議論がなされました。多数の海外参加者にも恵まれ、文字通り国際色豊かとなった本会議では、単に英語で議論する以上の、政策立案や合意形成のための交渉までが実現されている模擬国連としても質の高いものとなりました。

そして、「高校生会議」では、「万人のための持続可能なエネルギー」つまり持続可能な開発のための環境や平等問題などに関する議論を志ある高校生が集まって行いました。スピーチや成果文書は英語、取扱う問題はこの先の国際社会において最も関心の高い事項、参加した高校生により早い時期から今後のグローバル社会で求められる知識・能力への足掛かりを与えられたことと自負しています。

大会全体を眺め、一言で表すなら、「模擬国連は多様化している」でしょう。充実した大学生活を夢見る新入生や熱意溢れる上回生の受皿としての会議は、単に知識や歴史を学ぶだけでなく、知恵を絞りそれを実現するに至るまでをも参加者に見通せるように設計されています。「クライシス」を用いた会議は模擬国連会議のゲーム性、あるいは可能性を広げるものであるし、外国人や高校生を多分に取り入れた英語・高校生会議は参加者のすそ野を広げるだけでなく、その将来へのプランにも多分に影響を与えるものとなるでしょう。多様化するグローバル社会に、関西大会も参加者・会議制作・運営それぞれの側から多様化し、進化しています。

最後になりますが、参加して下さった大志ある学徒の皆様、それを受け容れるべく知恵を絞り、大変な労力を注いでくれた会議制作・運営の皆様にそれぞれ深く感謝し、総括とさせていただきます。ありがとうございました。

V 企画報告

■ 基調講演

1. 概要

KMUNC17 開会式における基調講演に株式会社ワークスアプリケーションズ最高経営責任者の牧野正幸様をお招きし、模擬国連というものに学生生活をかける人に対して考えるべきキャリアへの理解や、今の社会について講演をいただいた。

牧野正幸様

大手建設会社、IT コンサルタントを経て、1996 年に同社を設立。現在、同社の製品である ERP パッケージソフト「COMPANY」は、ERP パッケージ市場において国産パッケージ No.1※となる。

また、イノベーションの源泉として優秀な人材の採用に注力し、「問題解決能力発掘インターンシップ」を始めとし、次々と新しい採用プログラムを実施。独自の人事戦略でも注目を集め、2010 年、「働きがいのある会社」第 1 位 (Great Place to Work Institute Japan) に選出、5 年連続ベスト 5 にランクインしている。経営者としても「理想の経営者 No.1」に選ばれるなど、幅広い支持を集めている。

2. 目的

例年の基調講演において、話が面白くないであったり、参加者満足度が必ずしも高いものではなかった。その原因は模擬国連という性質を重視することにより、人前で話すことが少ない方をお呼びすることになったり、広報の場として使用されることになってしまい、お話のほとんどが自己紹介になってしまっていた現実があったためである。それらを改善するために人前で話すことが多く、担当者が実際にお話を伺ったことがあり、面白いと感じた方をお呼びすることにした。

3. 成果

参加者満足度は全体的に高い傾向にあったと思われる。理由は、参加者が講演会中笑いなどの反応をしており、注目して聞いていたことがうかがえるからである。また、企業様とのコネクションとしてこれから引き継げば今後の協賛なども得やすくなる可能性がある。

4. 課題

今年は基調講演が例年に比べて倍以上(例年は 20~30 分程度だが今年は 1 時間 20 分)の時間になってしまった。昨年は内閣府のイベントとタイアップすることにより、会場費の補助などをいただいていたので、今年はそれがなくなっている。今後は長い時間の基調講演を行うときに、

その時間をいかに渉外獲得金と結びつけていくかが課題である。また、基調講演の内容に関しては、今回は学生に向けたものになっていたのも、模擬国連をやっている学生に向けたものができるのであれば、そのほうが参加者満足度の増加をもたらせそうである。

■当日企画

1. 概要

本大会の当日企画として二つの企画（以下、当日企画①、②）を行いました。

① 代行お菓子デリバリー企画

大会事務局が用意したお菓子とメモを 100 円で購入し、渡したい相手に事務局員経由にてメッセージ付きお菓子をプレゼントすることができるという企画。

② 関西大会特製グッズ企画

模擬国連関西大会の特製ロゴ等を入れて作成したオリジナルグッズ 2 点（ピンバッジとクリアファイル）を販売、シールを無料配布するという企画。

2. 目的

会議の疲労を癒やす娯楽的企画を大会中に設置し、コンテンツとして成り立たせることで大会を一層華やかに盛り上げること、また運営事務局の新たな収益を手に入れること、の二点を目的として置いていた。

3. 成果

① 代行お菓子デリバリー企画

参加者からは好評であった。自由に動き回りにくい会議中において、事務局員経由にてメッセージとお菓子を渡すという方法を取ったため、忙しい中でも参加しやすかったという点、また SNS が流行し、主に連絡を取り合う場合は電子媒体を通して行う現代において、自分の伝えたいメッセージを紙媒体でプレゼントするという粋な試みが参加者から高評価を頂いた理由ではないかと考える。これまでの関西大会では一度も行わなかった企画であるが、来年度以降も続ける価値は十二分にあると言える。

② 関西大会特製グッズ企画

ピンバッジ、クリアファイル、シールの三点とも参加者が入手し、日常的に使用することで、各参加者の所属する研究会や支部、または大学に対する「模擬国連関西大会」の宣伝に繋がったと考える。特にシールは、「模擬国連」において必須であるパソコンに貼る参加者が多数いたため特に宣伝効果があったのではないかと推測する。

ピンバッジについては用意していた 100 個全てを完売、クリアファイルに関しても完売までには至らなかったものの、黒字にて終了したため、収益的にも効果があった。

4. 課題

今回の両企画とも成功したと考えているが、もしも来年度以降、今年度以上に企画自体の規模を拡大させたり、毎年の関西大会における 1 つのコンテンツとして常に成り立たせようと構想するならば、より詳細な価格設定や予算決定、細部に至る企画の詰め込みを行う役職を置くべきだと考える。また規模拡大に比例して起こりうる問題の対処方法も必ず企画時点で考慮しておくべきである。

■レセプション

1. 概要

大会最終日である 8 月 30 日の閉会式後に、アリストンホテル神戸の 16 階の宴会場「バルセロナ」でレセプションを実施しました。会場での食事は、同じ会議の参加者だけでなく、他の会議の参加者との交流がしやすいように立食形式としました。レセプションの主なコンテンツは、大会の様子のダイジェスト映像の投影、各会議で Best Delegate 賞（会議で最も優秀だった者に会議作成者から贈られる）を受賞した者のスピーチ、4 年間大会に出場した参加者の表彰、参加会議・所属研究会または支部ごとの記念撮影でした。また、コンテンツの間の時間や記念撮影後には自由時間を設け、参加者には各々で歓談していただき楽しんでいただきました。

2. 目的

レセプションの目的は二つあり、一つ目は全国から来る多くの人との交流の場を提供すること、そして二つ目は 3 日間の会議で疲れた頭と体を上質な料理を楽しみながら癒してもらうことです。レセプションでは参加会議の参加者との交流はもちろん、会議期間中にはなかなか関わることのできない他の会議の参加者と交流することができます。また、食事はホテルの方に用意していただくということもあり、その質は非常に高く、その食事を時間を気にすることなく歓談しつつ楽しんでいただくことができます。

3. 成果

3 日間の会議終了後ということもあり、レセプションでは参加者が達成感に満ちた様子で食事や歓談を楽しむ姿を目にすることが出来ました。Best Delegate 賞受賞者のスピーチでは、ユーモアのあるスピーチや、模擬国連に対する想いやこれからの抱負等を述べ、会場からあたたかな拍手を送られていました。また、記念撮影では会議や所属研究会・支部だけではなく、過去に行われた会議の参加者等でも写真を撮影し、大いに盛り上がりました。

4. 課題

今年度レセプションを開催する上で最も反省すべき点は、大会事務局員同士での事前の打ち合わせ不足です。レセプション全体として最終的には上手くいきましたが、直前まで準備が整っておらず、大会事務局員はもちろん、会場をご提供してくださっているアリストンホテル神戸の皆様にもご負担をおかけしてしまいました。これを受けて、来年度は会場までの誘導や時間調整等しっかりと事前に打ち合わせをして、レセプション運営に携わる皆様のご負担をより軽減できるよう努めてまいります。

最後に、この場をお借りして関係各位に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

■大会見学ツアー

1. 概要

「模擬国連」とは何かを説明した後、7つの会議を順番にツアー形式でまわっていき、各会議にて会議監督(会議作成者)より、いったい現在どんなことが議論されているのかや、議題についての詳しい説明を受け、理解を深める。

模擬国連会議に出場しない、模擬国連初心者で、知識を持っていない高校生・大学生を主な対象として午前午後の二部制にし、開催した。

2. 目的

3. (1) 模擬国連関西大会の中で、会議とは異なったコンテンツを提供することで、大会の魅力を向上させる。

4. (2) 高校生やJMUN 会員でない一般の大学生に、大学模擬国連の魅力を知ってもらうことで、大学模擬国連の規模拡大、将来の日本模擬国連会員数向上を狙う。

5. という二つの目的を掲げていた。

6. 成果

結果的に午前の部にて 2 人、午後の部にて 5 人の参加者となった。人数的に少なく思える。だが午前の部の参加者一人と午後の部の参加者一人の合計二人が今大会見学ツアー後、日本模擬国連神戸研究会の勉強会に参加をしてくださったり、午後の部参加者の中には高校の教師の方がおり、高校生たちに対して行う授業の中で行う模擬国連のミニ会議のモデルとして是非今大会を参考にさせていただきたいとお言葉をいただく等、十分成果を得られた。この大学模擬国連活動者の増加や日本模擬国連の知名度の向上は、日本模擬国連の規模拡大に一助となったのではないかと考える。

■神戸名所観光企画

1. 概要

8月31日に大会企画の一環として実施されました。これは、関西大会終了の翌日に行われ、神戸の観光名所を大会参加者が回っていくというものでした。観光名所には、メリケンパーク・南京町・北野異人館を指定しました。それらを基に3つのルートを指定し、5つの班を会議毎に設け、自由に観光させるという、参加者にとって自由度の高い企画を提供しました。

2. 目的

当該企画の目的は、3つの目的により計画されました。1つは参加者の満足度向上、次に国際都市「神戸」と関西大会@「神戸」のブランドイメージ向上、最後に協賛企業への利益還元です。各目的の狙いは以下の通りです。

参加者満足度は、向上させることによる大会リピート率を高めることが狙いでした。ブランドイメージの向上の狙いとしては、他大会に対するより明確な差異化を図るためでした。これまで神戸で大会開催するにもかかわらず、「神戸」としての要素を活用しきれていない、という反省から起因しております。協賛企業への利益還元は、企画に協賛企業様からのサービスを参加者に提供することにより、参加者側はサービスを受け、企業側は知名度やブランド力を高める、というWin Winの関係を狙いとしてしました。

3. 成果

まず、具体的なデータとしては、参加者は49名が予定されておりましたが、当日キャンセルが相次ぎ、9名キャンセルの結果、40名で神戸を観光しました。当初の目標は50人以上、打切りは20人以下ということでしたので、目標を達することは叶いませんでしたが、無事実施することができました。また、荷物置場用の建物がホテルバス下車後のバス停から非常に近く円滑に荷物運びを行うことが可能でした。

4. 課題

当企画の課題として、パンフレットの記載やコースの下見等の提供したパンフレットの情報不足、夏場での3か所巡りの疲労具合を加味していなかった、などといった全体的な企画における準備不足による参加者への配慮の欠如、協賛企業と参加者の関係見込みの甘さ、という2つが挙げられます。

まず、始めの問題として、パンフレットや観光コースの下見といった準備が行き届いておらず、参加者を非常に疲労させてしまった、ということが挙げられます。具体的には、パンフレットに移動手段として徒歩のみを記載し、バス・電車の情報を記載しておらず、参加者からは「夏場に 3 か所を徒歩で回るのは体力的に厳しい」とのご意見をいただきました。観光コースの下見も開催当日に近い夏場ではなく、春に参加者を非常に疲労させてしまいました。次に、当日が夏場ということ考虑せず、春に行った下見で観光コースを計画してしまったため、参加者からは「3 か所ではなく 2 か所でよかった」とのご意見をいただきました。同じく参加者を披露させてしまいました。これらの問題 2 点は、次回企画時に、対応した準備を行うことで改善できる点かと思われます。

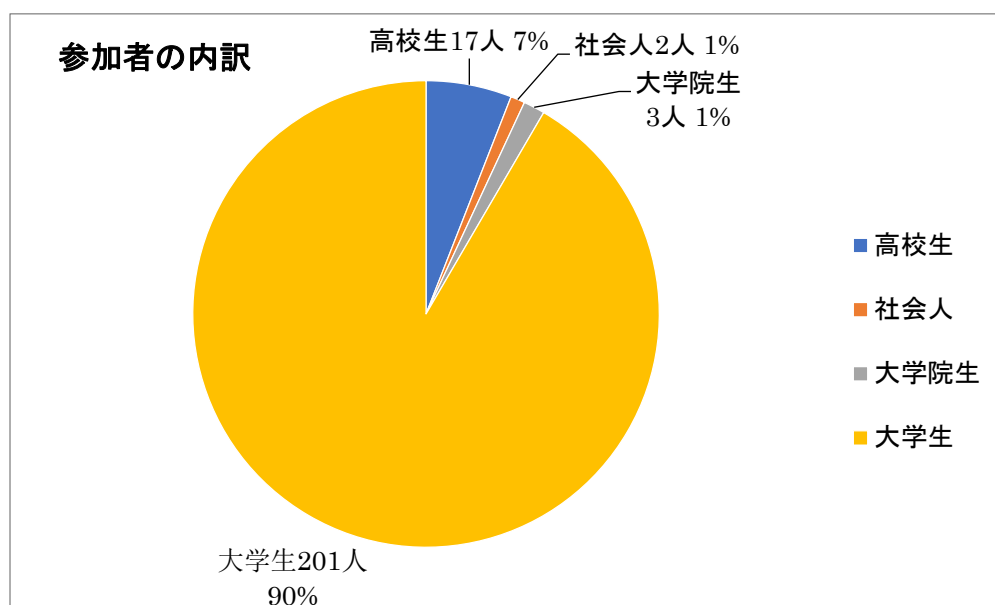
最後の問題は、協賛内容において、協賛企業様の要望と参加者の満足度の維持が相対し、妥協点を見いだせずに終わってしまったということです。この問題に関しては、今後も検討せねばなりません。

VI運営報告

■参加者データ

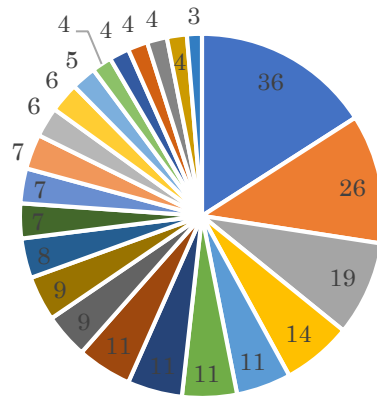
参加者	223 名
運営スタッフ(当日の補助スタッフを含む)	57 名

本大会に関わった人々は運営スタッフを含めると 280 名に上り、昨年度大会に引き続き過去最大規模の大会になりました。来年度以降は、昨年、今年度と拡大した規模をどれだけ維持できるかが課題となってくるでしょう。



大学生の所属する団体という関係上、今回の参加者は例年通り大学生が中心である一方、本大会より高校生会議を新しく設けたため、高校生の参加者の方も昨年と比べ増加しています。高校生の参加者は、各高校に送付したポスターを見ての参加が多くいらっしゃいました。

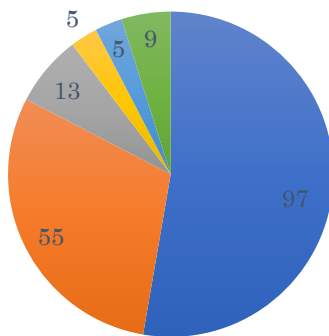
参加者学校内訳(大学)



- 同志社大学
- 早稲田大学
- 上智大学
- 東京大学
- 立命館大学
- 神戸市外国語大学
- 京都大学
- 東京外国語大学
- Tokyo International Univ
- 慶應義塾大学
- 大阪大学
- 横浜市立大学
- 神戸大学
- 北九州市立大学
- 津田塾大学
- 獨協大学
- 明治学院大学
- 法政大学
- 横浜国立大学
- 関西学院大学
- 立命館アジア太平洋大学
- 青山学院大学
- 京都産業大学

全国規模の大会ということもあり、日本各地の大学から参加者が集いました。また、関西地方における大会であったため、関西地域の大学からの参加者も多かったです。これからの課題として、人数規模が多い関東の大学からの参加者をどれだけ増やすかを検討する必要があります。

模擬国連経験年数

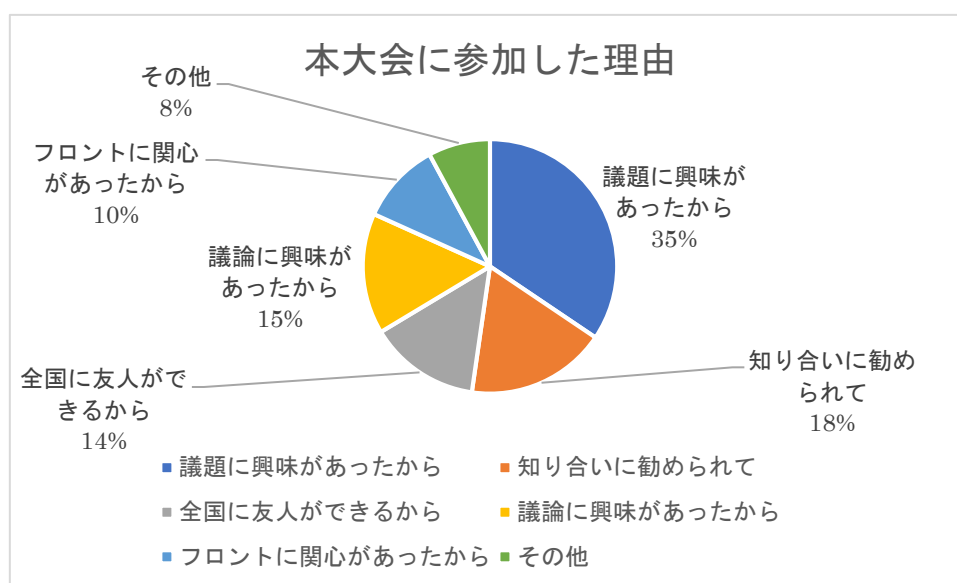


- 1年目 ■2年目 ■3年目 ■4年目 ■それ以上 ■無所属

本大会は模擬国連活動を始めたばかりの大学 1 年生の参加者の方が多くみられるため、本大会での会議が参加者にとって通算 1-4 回目の会議である方が半数以上を占めています。JMN

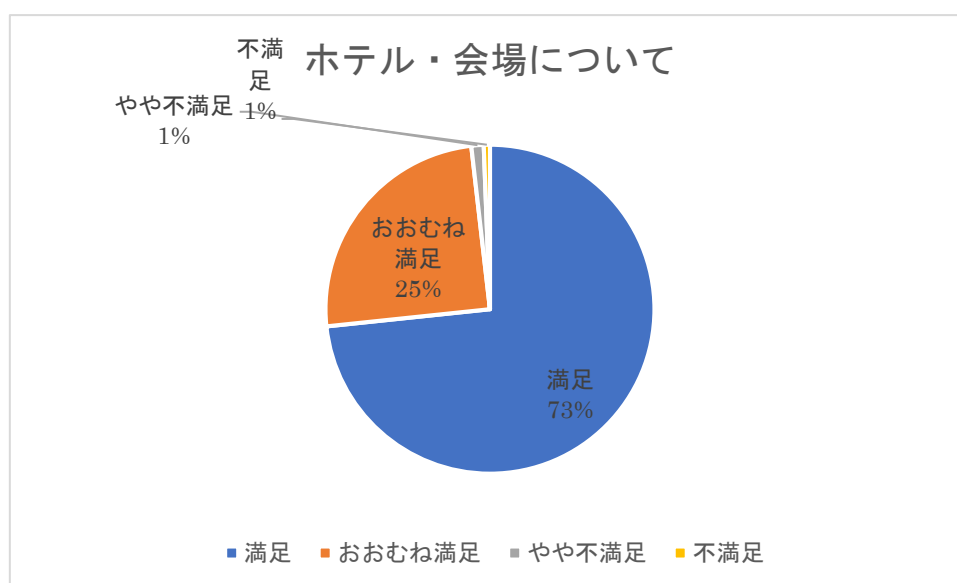
未所属者の方をはじめ今大会での会議がはじめての模擬国連会議である方も 1 割存在していました。その方々には会議前日に模擬国連会議の流れを実践的に体験できるミニ会議企画を実施し、サポートに努めました。

■大会アンケート結果

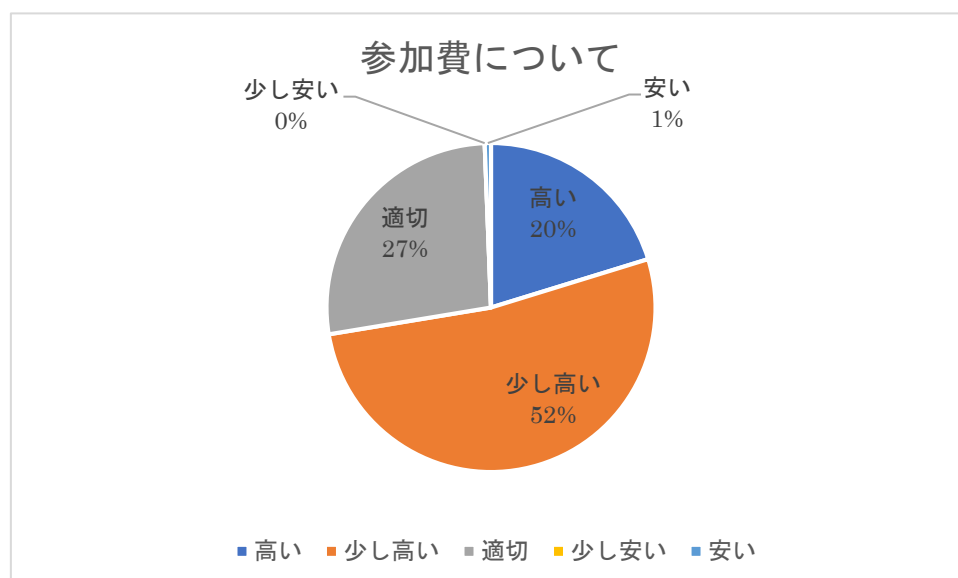


本大会に参加した理由で最も多かったのは、例年通り「議題への興味」でした。やはり、大会の核である各会議の内容に惹かれて本大会への参加を決めた方が多いようです。それに続いて、過去に本大会に参加した先輩からの生の声などの「知り合いの勧め」、模擬国連活動そのものの魅力である「議論への興味」日本各地からの参加者が集まる全国大会ならではの魅力である「全国規模での友達づくり」が続きました。

今後も様々な分野から幅広い内容を持つ会議を制作することで、参加者の皆様の様々なニーズに応えることができるようにしたいと思います。

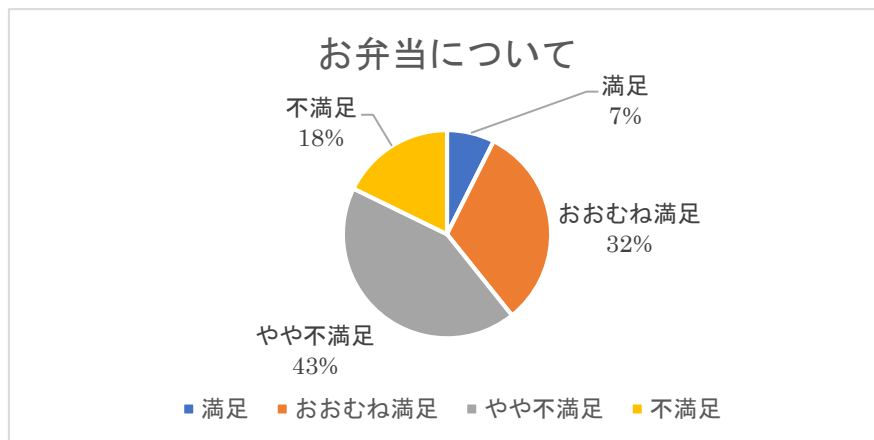


昨年度に引き続き、ホテルや会議場について多くの参加者の皆様に満足していただきました。神戸での開催は今年度で 4 年連続であり、神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場の担当者の方の大会前の運営スタッフの要望への対応、期間中のトラブルに対する迅速な対応などが参加者の皆様の満足度につながったのではないかと考えております。

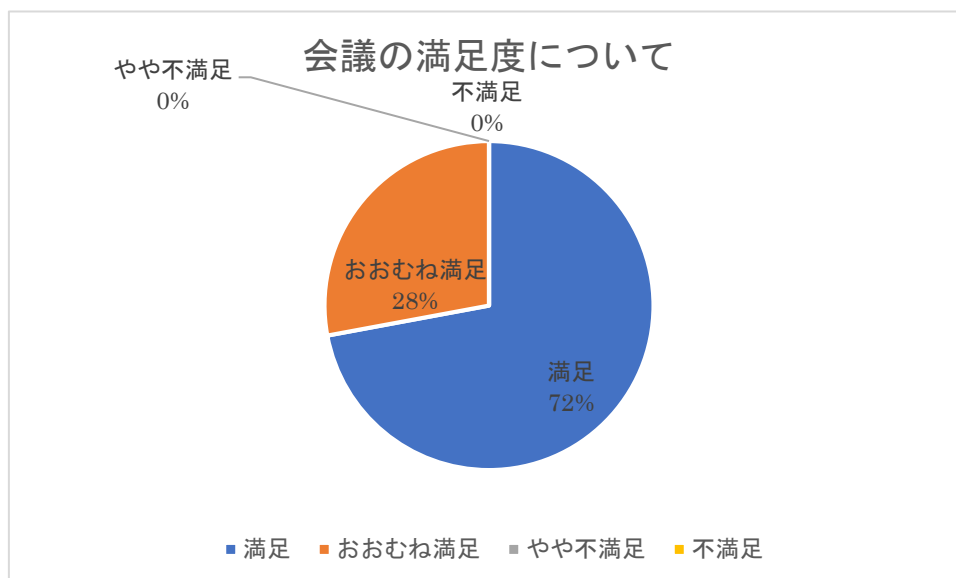


昨年の参加費が 24,000 円、本大会はインバウンド需要による宿泊費の増大により 26,000 円と昨年よりも参加費が高額になりましたが、「高い」、「少し高い」を選んだ参加者の方の割合はほぼ昨年と変わりありませんでした。一方で 26000 円という参加費は学生にとって決して安いものではありませんし、実際に「高い」「少し高い」という参加者が多いことを考えれば、例えば最低限必要となる会議場のみこちらで手配し、ホテルについてはこちらで斡旋などは行うものの、予約を各自で行うことで参加費を低減させるなどの取り組みが必要かと思われますし、参加費に見合うだけの価値を提供し、参加者に「これだけの経験が出来るならこの参加費は高くない」と思わせる努力

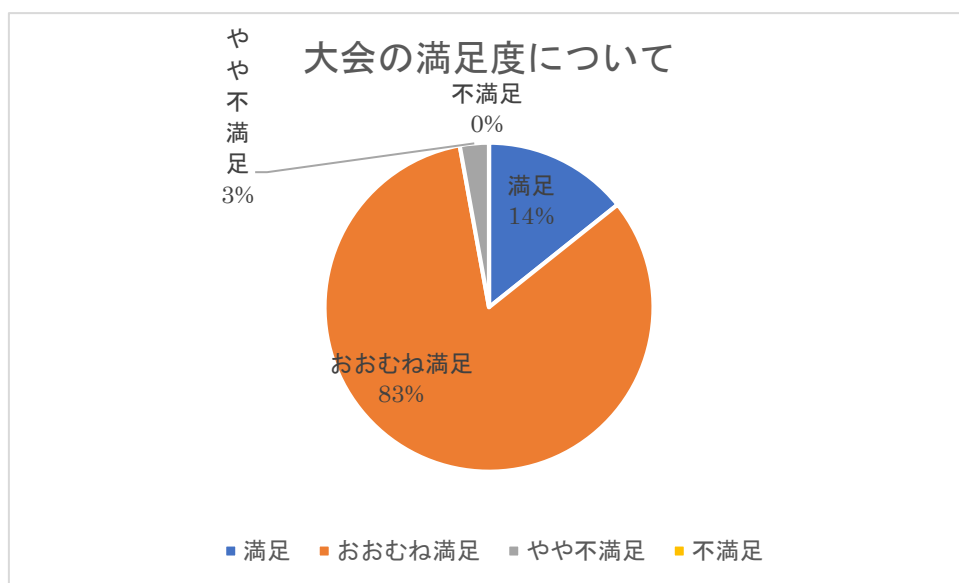
も必要です。



本大会では、今年度は神戸ポートピアホテルの関連業者に依頼し、弁当配布を希望する参加者に対し別料金(500 円)で販売するという形式をとりました。こちらについては参加者からも好評で、ほぼ 100 パーセントに近い参加者が「希望者にのみ弁当を配布する」形式を、これからの大会においても希望すると答えています。一方、お弁当の価格については妥当と答えた参加者が多数(およそ 7 割)を占めたものの、6 割近くの方がお弁当に対し「やや不満足」「不満足」と答えています。お弁当の価格と質はトレードオフの関係にあり、両者を併存することは難しいため、今後も希望者にのみ弁当を配布するという方法が最も参加者の利益につながるのではないかと考えております。



全ての参加者に「満足」「おおむね満足」と答えていただきました。これについては、各会議監督(会議設計者)の参加者に対するサポートなどの賜物であると考えております。その結果が、後述の大会自体の満足度にも繋がったと考えております。



大会全体を通して、「満足」「おおむね満足」と答えた参加者がほぼ全体を占めました。これらについては、先述の会議やホテルへの満足が積み重なった結果であると考えております。来年度についても、より「満足」の割合を増やせるよう、努力を続けてまいります。

■参加者向け広報活動

1. 概要

本活動では模擬国連会議関西大会広報用のポスター、チラシ、PR動画を制作しました。

ターゲットは日本模擬国連(JMUN)会員で、各研究会・支部の活動日に伺い、PR動画を上映、チラシ配布をして、直接関西大会の魅力を伝えるなど、直接的な広報活動を行いました。

今年は潜在的な大学生向け模擬国連の参加者である高校生向けの広報活動にも力をいれました。部活などで模擬国連の活動が行われている高校や、高校生対象の模擬国連全国大会出場校など計100校に電話やメール、ポスター・チラシ郵送による広報を行いました。

また、ホームページやfacebook、twitterの関西大会公式アカウントを作成し、随時更新しました。

2. 目的

大会参加者のさらなる獲得が本活動の目的です。

3. 成果

参加人数は本大会に関わった人々は運営スタッフを含めると280名に上り、目標人数の270人

を達成することができました。今年度大会も昨年度大会に引き続き、過去最大規模の大会になりました。また、高校生参加者も昨年よりも2倍ほど増加し、17 人の方に参加していただくことができました。

4. 課題

昨年度よりもキャンセルが多く出ました。今後は募集終了後も継続的な広報を心掛け、参加者のモチベーションを持続させることが大切であると考えます。

■取材広報活動

1. 概要

本大会では、模擬国連活動と本大会の開催およびその内容について報道機関に対し事前広報を行い、実際に興味を持っていた報道機関に取材および各媒体での掲載・放映をしていただきました。

2. 目的

本大会の取材および報道を通じて、社会における模擬国連活動の一層の周知と普及を図ることが本活動の目的です。また、本大会にご協力いただいた企業団体様の社会への一層の周知も目的としております。

3. 成果

本大会では、神戸市市政記者クラブへのプレスリリースの投げ込みや、報道機関各社への資料の送付を行った結果、神戸新聞より取材および掲載をして頂きました。これらの取材広報により模擬国連活動と本大会のさらなる周知がなされたとともに、周知向上に伴う活動の普及も期待されます。

神戸新聞には以下の日程で掲載をしていただきました。

・神戸新聞 8月29日朝刊

4. 課題

本大会は昨年と比較して、取材していただく報道機関、掲載していただく媒体が減少いたしました。大会の開催時期を考慮した上での各報道機関各社への大会の案内の時期、送付するプレスリリースなどの資料の内容などの見直しが今後必要になると考えます。

■会計報告

収入の部

収入	参加費	¥	6,994,300
	協賛	¥	155,560
	助成	¥	400,000
	雑費収入	¥	32,554
	昨年度繰越し金	¥	601,249
収入合計		¥	8,183,663

支出の部

支出	ホテル会場費	ポートピアホテル	¥	4,265,630
		アリストンホテル	¥	759,500
		神戸国際会議場	¥	2,096,230
	印刷関連費		¥	83,595
	通信郵送費		¥	14,519
	諸経費		¥	6,372
	交通費		¥	15,270
	スタッフ補助費		¥	273,000
	備品費		¥	83,487
	来年度繰越し金		¥	586,060

■支援団体一覧(五十音順・敬称略)

【助成】

公益財団法人中内力コンベンション振興財団

【特別講演】

株式会社ワークスアプリケーションズ

【後援】

外務省 神戸市 独立行政法人国際協力機構関西国際センター(JICA 関西)

国際連合広報センター 兵庫県国際交流協会 文部科学省 特定非営利活動法人 HANDS

認定特定非営利活動法人 AMDA

【協賛】

週間英和新聞 Asahi Weekly 学校法人河合塾 日本国際連合協会兵庫県本部

三幸製菓株式会社 株式会社トリプルファースト(留学ドットコム) 株式会社ガロア

株式会社イッカツ 株式会社 futurelabo ケンプトン株式会社

キャリア甲子園 キャリアインカレ

VII.運営者一覧

役職	氏名	所属	対外メールアドレス
運営事務局			kmunc17_info@kansai-mun.org
事務総長	奥山智司	同志社大学政策学部3年	kmunc_sg@kansai-mun.org
研究統括	城友莉香	立命館大学文学部3年	kmunc_dg@kansai-mun.org
研究統括補佐	辻郷孔凡	京都大学法学部4年	kmunc_adg@kansai-mun.org
総務統括	西山加奈子	同志社大学政策学部3年	kmunc_gm@kansai-mun.org
総務	玉井晃平	神戸大学文学部人文学科3年	
会計	穂積瑞希	京都産業大学文化学部3年	kmunc_fm@kansai-mun.org
広報・情報処理	玉置大祐	同志社大学 グローバル地域文化学部3年	kmunc_press@kansai-mun.org
広報	藤原明依	神戸市外国語大学外国語学部 2年	kmunc_press@kansai-mun.org
高校広報	佐伯壮一朗	大阪大学医学部医学科2年	kmunc_hspr@kansai-mun.org
アドバイザー	長岡幸佑	同志社大学 グローバル地域文化学部4年	kmunc_hspr@kansai-mun.org
渉外	八木将行	同志社大学法学部3年	kmunc_pr@kansai-mun.org
	埋橋光	同志社大学政策学部2年	kmunc_pr@kansai-mun.org
	徳ひまわり	同志社大学法学部2年	kmunc_pr@kansai-mun.org

昨年度大会ホームページ URL: <http://www.kansai-mun.org/kmunc17/>

twitter: <https://twitter.com/KMUNC>

Facebook: <https://www.facebook.com/kmunc17/>